

埼玉県熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第2集

前中西遺跡 X

2016

埼玉県熊谷市遺跡調査会

埼玉県熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第2集

まえ なか にし い せき
前 中 西 遺 跡 X

2016

埼玉県熊谷市遺跡調査会

序

平成 17 年 10 月 1 日、熊谷市、大里町、妻沼町の一市二町が、さらに平成 19 年 2 月 13 日、江南町と合併して、新『熊谷市』が誕生いたしました。

新『熊谷市』は、南北約 20 km、東西約 14 km にわたり、面積は 159.82 km²、人口は 20 万人を超えることとなり、県北最大の都市として生まれ変わりました。新市は、関東平野を縦横に流れる荒川と利根川の 2 大河川が最も近接する流域に位置し、平坦な地形に肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。

こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

本書は、熊谷市遺跡調査会により平成 26 年に発掘調査を行った前中西遺跡について報告するものであります。本遺跡からは弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落が確認され、長期にわたって人々が住み続けたことが判明しています。また、調査地点周辺は土地区画整理事業に伴う発掘調査が行われており、これらの成果と併せて、本市の歴史的発展を考証する上でも非常に重要なものといえます。本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、御理解、御協力を賜りました株式会社埼玉住宅情報センター及び株式会社ファイブイズホーム並びに地元関係者には厚くお礼申し上げます。

平成 28 年 3 月

熊谷市遺跡調査会
会長 野原 晃

例 言

- 1 埼玉県熊谷市末広三丁目104番2及び末広四丁目2506番7、2506番8、2506番9、2506番12、2509番2、2509番8に所在する前中西遺跡（埼玉県遺跡番号59－092）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は分譲地造成及び分譲住宅建設に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市遺跡調査会が実施したものである。
- 3 本事業の組織は、第1章3のとおりである。
- 4 発掘調査期間は次のとおりである。
前中西遺跡 第1地点 末広三丁目104番2：平成26年8月18日～平成26年10月10日
第2地点 末広四丁目2506番7ほか：平成26年11月4日～平成26年11月25日
- 5 発掘調査及び報告書執筆・編集は、熊谷市教育委員会 蔵持俊輔が担当した。
- 6 発掘調査に係る写真撮影及び遺物の写真撮影は、蔵持が行った。
- 7 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会で保管している。
- 8 本書の作成にあたり、下記の方々などからご教示、ご協力を賜りました。

（敬称略、五十音順）

新井 端 金子正之 清水康守 菅谷浩之

凡 例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

- 1 遺構挿図の縮尺は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

遺構の略記号は次のとおりである。

SA：柵跡 SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SI：竪穴建物跡

SK：土坑 SX：性格不明遺構 P：ピット

第1地点・第2地点全測図…1/100 遺構平面図・断面図…1/60

- 2 遺構挿図中のスクリーントーン等は次のとおりである。

 = 地山

- 3 遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

- 4 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

土師器・須恵器・磁器・陶器…1/4 石製品…1/2、1/4、1/8

- 5 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

弥生土器・土師器断面：白抜き 須恵器断面：黒塗り 灰軸陶器断面：

実測図の中心線は実線で示している。

遺物挿図中の断面箇所以外のスクリーントーンは赤彩・施軸範囲を示す。

 = 赤彩範囲  = 施軸範囲

- 6 遺物拓影図は、向かって左に外面、右に内面を示した。

- 7 遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位はcm、gである。()が付されるものは推定値、現存値を表す。胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で、含有量の多い順に示した。

A…白色粒子 B…黒色粒子 C…赤色粒子 D…褐色粒子 E…赤褐色粒子 F…白色針状物質
G…長石 H…石英 I…白雲母 J…黒雲母 K…角閃石 L…片岩 M…砂粒 N…礫

- 8 写真図版の遺構・遺物の縮尺は、すべて任意である。

- 9 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局編集、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行 1994）を参考にした。

目 次

序		第 6 図	第 2 地点全測図	10
例 言		第 7 図	第 1 号竪穴建物跡	12
凡 例		第 8 図	第 1 号竪穴建物跡出土遺物	13
目 次		第 9 図	第 2・3 号竪穴建物跡	14
I 発掘調査の概要	1	第 10 図	第 2 号竪穴建物跡出土遺物	15
1 調査に至る経過	1	第 11 図	第 3 号竪穴建物跡出土遺物	16
2 発掘調査・報告書作成の経過	2	第 12 図	第 1 号掘立柱建物跡	17
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	3	第 13 図	第 1 号掘立柱建物跡出土遺物	18
II 遺跡の立地と環境	4	第 14 図	第 1 号溝跡	19
III 遺跡の概要	11	第 15 図	第 1 号溝跡出土遺物	19
1 調査の方法	11	第 16 図	第 2 号溝跡	20
2 検出された遺構と遺物	11	第 17 図	第 2 号溝跡出土遺物	21
IV 遺構と遺物 1 第 1 地点	12	第 18 図	第 3～7 号溝跡	23
1 竪穴建物跡	12	第 19 図	第 8～14 号溝跡	25
2 掘立柱建物跡	18	第 20 図	第 4～7・9・11・12 号溝跡出土遺物	27
3 溝跡	18	第 21 図	第 1～13 号土坑	29
4 土坑	28	第 22 図	第 2・5・7 号土坑出土遺物	31
5 柵列跡	35	第 23 図	第 8～12 号土坑出土遺物	32
6 性格不明遺構	36	第 24 図	第 1 号柵列	35
7 ビット	36	第 25 図	第 1 号性格不明遺構	36
8 遺構外出土遺物	44	第 26 図	ビット (1)	37
V 遺構と遺物 2 第 2 地点	45	第 27 図	ビット (2)	38
1 竪穴建物跡	45	第 28 図	ビット (3)	39
2 掘立柱建物跡	49	第 29 図	ビット (4)	40
3 土坑	52	第 30 図	ビット出土遺物	41
4 ビット	53	第 31 図	第 1 地点遺構外出土遺物	44
5 遺構外出土遺物	54	第 32 図	第 1 号竪穴建物跡	45
VI 調査のまとめ	55	第 33 図	第 1 号竪穴建物跡出土遺物 (1)	46
		第 34 図	第 1 号竪穴建物跡出土遺物 (2)	47
挿図目次		第 35 図	第 1 号掘立柱建物跡	49
第 1 図 埼玉県の地形図	4	第 36 図	第 2 号掘立柱建物跡	50
第 2 図 周辺遺跡分布図	5	第 37 図	第 2 号掘立柱建物跡出土遺物	50
第 3 図 調査地点位置図	7	第 38 図	第 3 号掘立柱建物跡	51
第 4 図 第 1 地点全測図 (1)	8	第 39 図	第 1・2 号土坑	52
第 5 図 第 1 地点全測図 (2)	9	第 40 図	第 1 号土坑出土遺物	52

第41図	ビット	53
第42図	第4号ビット出土遺物	54
第43図	第2地点遺構外出土遺物	54
挿表目次		
第1表	周辺遺跡一覧表	6
第2表	第1号堅穴建物跡出土遺物観察表	13
第3表	第2号堅穴建物跡出土遺物観察表	15
第4表	第3号堅穴建物跡出土遺物観察表	16
第5表	第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表	18
第6表	第1号溝跡出土遺物観察表	19
第7表	第2号溝跡出土遺物観察表	21
第8表	第4・7・9・11・12号溝跡出土遺物観察表	28
第9表	第2・5・7～12号土坑出土遺物観察表	34
第10表	ビット出土遺物観察表	41
第11表	ビット計測表	42・43
第12表	第1地点遺構外出土遺物観察表	44
第13表	第1号堅穴建物跡出土遺物観察表	48
第14表	第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表	50
第15表	第1号土坑出土遺物観察表	52
第16表	ビット計測表	53
第17表	ビット出土遺物観察表	54
第18表	第2地点遺構外出土遺物観察表	54

図版目次

図版1	第1地点 第1調査区全景 第2調査区東側全景 第2調査区西側全景
図版2	第1号堅穴建物跡 第2号堅穴建物跡 第3号堅穴建物跡、第13号溝跡
図版3	第1号掘立柱建物跡、第6～12号土坑 第1～3号溝跡、第1号櫓列、第13号土坑 第2・13・14号溝跡、第1号性格不明遺構、第1号櫓列、第4号土坑
図版4	第4・5号溝跡 第6～8号溝跡 第9～11号溝跡 第1号土坑 第2号土坑 第2号土坑遺物出土状況 第3号土坑
図版5	第5・6号土坑 第7号土坑 第7号土

図版6	坑遺物出土状況 第8号土坑 第1号性格不明遺構 第102号ビット 調査風景 第2地点 第1調査区全景 第2調査区全景
図版7	第1号掘立柱建物跡 第2号掘立柱建物跡 第1号堅穴建物跡 第1号堅穴建物跡遺物出土状況1・2 第1号土坑 第2号土坑
図版8	第8図1～8 第10図1-2 第10図3～14 第11図1～9・11 第11図10 第15図1～12 第17図1～9・11～16 第17図17～20 第20図04-01,05-01～03,06-02,07-01-02
図版9	第13図1・2 第20図05-01-06-01 第20図9-01～11 第20図09-12～14,11-01,12-01 第22図02-01-02-04～06,05-01～04 第22図02-03 第22図07-01 第22図07-02 第22図07-05 第22図07-08 第22図07-03-04-06-07-09～15
図版10	第22図07-16～22 第23図08-01～13 第23図08-14,09-01,10-01-02,11-01,02-12-01-02 第31図1・3～7・10～15 第31図2 第31図8 第31図9 第30図001-1・2,010-1,034-1・2,035-1・2,036-1,072-1,083-1101-1,105-1,122-1,125-1,128-1 第30図095-1 第30図102-1
図版11	第33図1・2・3・4・5・6・8・10・11・15・16・17・18・19・20・21・29・30・31・35 第34図40
図版12	第33図7・9・12～14・22・23・26・24・25・28・27 第33図32～34・36・37・38・39, 第34図41・42 第34図43～47・48～50 第37図1～3 第40図1・4～6 第40図2 第40図3 第41図1・2 第43図1・2・3・4・5・6・7・8・9

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

平成 26 年 6 月 12 日付けで群馬玉住宅情報センター代表取締役小暮靖志より末広三丁目地内(以下「第 1 地点」という)、平成 26 年 9 月 2 日付けで群馬ファイブイズホーム代表取締役細井保雄より末広四丁目地内(以下「第 2 地点」という)の分譲地造成及び分譲住宅建設に係る埋蔵文化財発掘の届出が提出され、埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて協議があった。予定地は前中西遺跡に該当する。予定地では、縄文時代後期から近世までの遺構・遺物が確認されており、工事に先立って発掘調査を実施する必要があると回答した。

熊谷市教育委員会では第 1 地点・平成 26 年 4 月 17 日、第 2 地点・平成 26 年 9 月 17 日に所在確認調査を実施したところ、複数の堅穴建物跡・溝跡・土坑等の遺構が検出された。工事内容は遺跡の破壊が不可避なもの及び恒常構築物にあたる道路であったため、保存策について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置が適当であるとの結論に至った。

この結果を踏まえて、第 1 地点・平成 26 年 8 月 12 日付け熊教社埋発第 208 号、第 2 地点・平成 26 年 10 月 24 日付け熊教社埋発第 349 号にて発掘調査の措置が適当である旨副申し、埼玉県教育委員会教育長あてに埋蔵文化財発掘の届出を送付した。その後、事業者あてに埼玉県教育委員会教育長から、第 1 地点・平成 26 年 6 月 25 日付け教生文第 4 - 377 号、第 2 地点・平成 26 年 10 月 9 日付け教生文第 4 - 1007 号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、発掘調査の指示通知がなされた。

事業主と具体的な協議を重ねたところ、早急に建設を開始したい意向があったが、調査実施には定例議会での補正予算の承認が必要であり、待機期間が発生する状況であった。そのため、熊谷市教育委員会では、工事の進捗に配慮し早急に発掘調査を実施する必要が生じた。そこで、第 1 地点・平成 26 年 8 月 5 日付け、第 2 地点・平成 26 年 10 月 24 日付けで埋蔵文化財に関する協定を事業主と締結したうえで、平成 26 年 8 月 6 日に熊谷市遺跡調査会を設立し、発掘調査を第 1 地点・平成 26 年 8 月 18 日から、第 2 地点・平成 26 年 11 月 4 日から実施した。

熊谷市遺跡調査会会長は、文化財保護法第 92 条第 1 項の規定に基づく発掘調査の届出を第 1 地点・平成 26 年 8 月 12 日付け熊遺発第 2 号、第 2 地点・平成 26 年 10 月 24 日付け熊遺発第 8 号で提出し、熊谷市教育委員会は副申を添えて埼玉県教育委員会教育長へ送付した。これに対し、第 1 地点・平成 26 年 8 月 25 日付け教生文第 2 - 32 号、第 2 地点・平成 26 年 11 月 12 日付け教生文第 2 - 50 号で発掘調査について通知があった。

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

第1地点・末広三丁目104番2地内の発掘調査は、平成26年8月18日から平成26年10月10日にかけて行われた。調査面積は、共同住宅の建設によって破壊を受ける230.00㎡である。

調査の手順は、排出土置場等の関係から、反転の手法を用いた。まず、重機により遺構確認面まで表土を除去し、その後人力による遺構確認作業を行った。検出した遺構は順次精査し、遺構平面図・断面図を作成し、随時個別の写真撮影を行った。最後に調査区全景の写真撮影を行い、反転して同様の作業を繰り返した。10月10日には器材等を撤収して現場における作業を終了した。大雨により調査区が水没するなどの被害があったが、調査区壁面は矢板にて補強しており、大規模な崩落は発生していない。しかし、湧水が調査期間中に絶えず発生しており、調査に少なからず影響があった。

第2地点・末広四丁目2506番7ほか地内の発掘調査は、平成26年11月4日から平成26年11月25日にかけて行われた。調査面積は、分譲住宅の建設によって破壊を受ける104.34㎡である。

調査の手順は、重機により遺構確認面まで表土を除去し、その後人力による遺構確認作業を行った。検出した遺構は順次精査し、遺構平面図・断面図を作成し、随時個別の写真撮影を行った。11月25日には調査区全景の写真撮影を行い、器材等を撤収して現場における作業を終了した。

(2) 整理・報告書作成

整理作業は、平成27年3月2日から平成28年3月31日にかけて実施した。

まず、遺物の洗浄・注記・接合・復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと平行して遺構の図面整理を行った。

次に、遺構・遺物のトレース・拓本を採り図版を作成した。そして、遺物の写真撮影、遺構・遺物写真の図版組みを行い、12月に原稿執筆・割付を実施した。翌年1月に報告書の印刷に入り、校正を経て3月31日に本報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

平成26年度 発掘調査

主 体 者	熊谷市遺跡調査会
会 長	野原 晃 (熊谷市教育委員会教育長)
副 会 長	米澤 ひろみ (熊谷市教育委員会教育次長)
理 事	菅谷 浩之 (熊谷市文化財保護審議会会長) 小野 美代子 (熊谷市文化財保護審議会委員)
監 事	正田 知久 (熊谷市教育委員会教育総務課長)
事務局長	岩上 精純 (熊谷市教育委員会社会教育課長)
事務局次長	森田 安彦 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護担当副参事)
事務局員	吉野 健 (熊谷市教育委員会社会教育課副課長兼文化財保護係長) 杉浦 朗子 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主査) 松田 哲 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主査) 小島 洋一 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主査) 藏持 俊輔 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主任) 腰塚 博隆 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主任) 山下 祐樹 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主任)
発掘担当者	藏持 俊輔

平成27年度 整理調査

主 体 者	熊谷市遺跡調査会
会 長	野原 晃 (熊谷市教育委員会教育長)
副 会 長	米澤 ひろみ (熊谷市教育委員会教育次長)
理 事	菅谷 浩之 (熊谷市文化財保護審議会会長) 小野 美代子 (熊谷市文化財保護審議会委員)
監 事	正田 知久 (熊谷市教育委員会教育総務課長)
事務局長	山崎 実 (熊谷市教育委員会社会教育課長)
事務局次長	森田 安彦 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護担当副参事)
事務局員	吉野 健 (熊谷市教育委員会社会教育課副課長兼文化財保護係長) 松田 哲 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主査) 小島 洋一 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主査) 藏持 俊輔 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主査) 腰塚 博隆 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主任) 山下 祐樹 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主任) 金子 正之 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主任)
報告書編集・執筆者	藏持 俊輔

II 遺跡の立地と環境

熊谷市は埼玉県北部に位置する。市の南側には荒川、北側には利根川がそれぞれ西から南東方向に向けて流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には市の西側に櫛挽台地、北・東側に妻沼低地、南側は江南台地が広がる（第1図）。

櫛挽台地は洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東方向へは熊谷市北西部の西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mで妻沼低地に向かって緩やかに下っていく。

櫛挽台地の東側には沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がっている。新荒川扇状地は熊谷市の南西に位置する深谷市の菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。また、三ヶ尻地区の荒川に面した櫛挽台地南東端には丘陵地である観音山（標高81m、第3紀層の残丘）があり、台地上からの比高差は約25m、沖積地からの比高差は約35mである。

今回報告する前中西遺跡は新荒川扇状地扇端部の自然堤防上に立地し、標高は24m前後である。前中西遺跡は弥生時代から近世までの複合遺跡であり、上之土地区画整理事業によって発掘調査が進行し、各時代で成果が挙がり、その概要が明らかになりつつある。

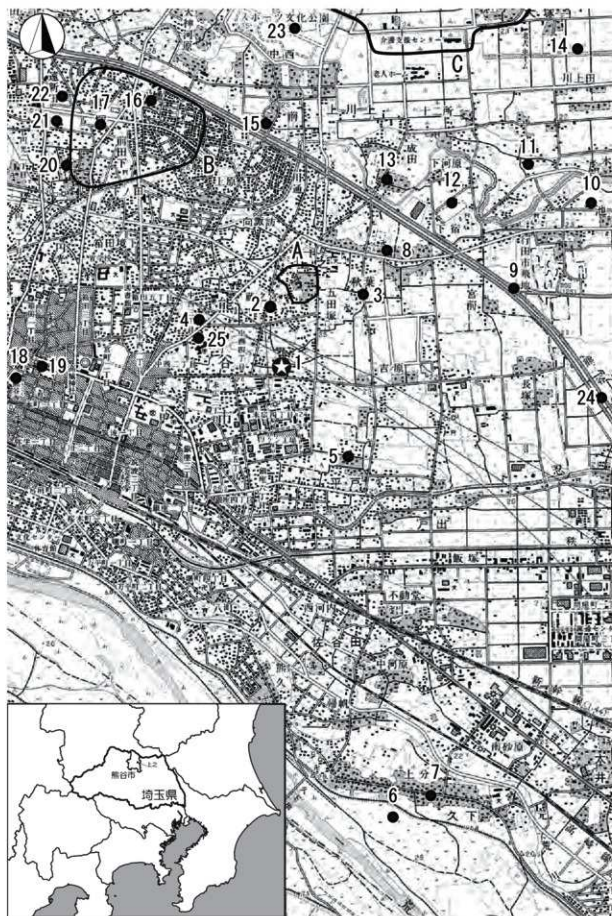
次に本遺跡周辺の歴史的環境を概観する。

本遺跡周辺では縄文時代後期より遺跡が確認される。諏訪木遺跡北部及び前中西遺跡からは、加曽利B式期以降の遺物がみられ、集落の所在が確認された。山形系統やミミズク等の土偶が出土し、晩期まで継続する様相がみられる。それ以前の時代の遺跡は、台地上や台地縁部の低地に所在が集中している。

本遺跡周辺は縄文時代晩期以降、痕跡が途絶えるが、弥生時代前期末から中期前半頃は藤之宮遺跡にて若干の遺物が採取されている。確認された遺構としては、再葬墓が顕著であり、横間梁遺跡、飯塚遺跡、飯塚北遺跡等が挙げられるが、台地縁部周辺地に所在が限られている。中期中頃になると新荒川



第1図 埼玉県の地形図（前中西遺跡位置図）



第2図 周辺道跡分布図

弱状地・低地への進出がみられるようになる。池上遺跡からは東日本でも最古段階の環濠集落が検出され、その墓域とみられる小敷田遺跡からは最古段階の方形周溝墓がみられ、進出の本格化が窺える。中期後半になると、前中西遺跡、北島遺跡、そして本遺跡で集落が営まれ、墓域が形成されている。前中西遺跡を中心としたエリアは当該期から後期初頭にかけて東日本でも屈指の遺構が集中する地点といえる。北島遺跡では、大規模な集落が営まれるとともに、墓域が形成されている。また、水田跡とその水路や堰の存在が確認され、本格的な水田経営が行われていたことが判明している。後期初頭以降は藤之宮遺跡で土器片が若干採取される程度で、遺構は確認されていない。

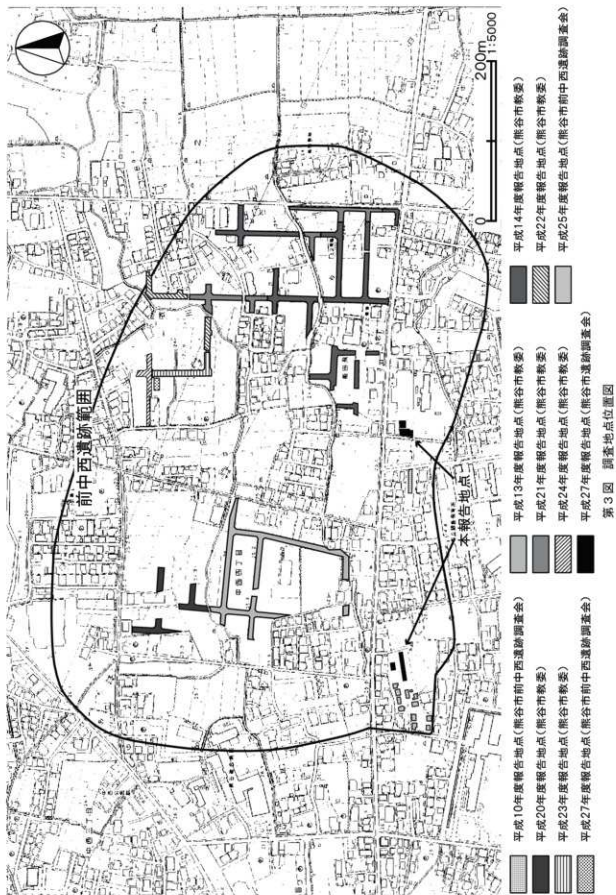
古墳時代前期では、前代に引き続き諏訪木遺跡、前中西遺跡、藤之宮遺跡、北島遺跡で集落跡が確認されたほか、諏訪木遺跡、北島遺跡、中西遺跡では墓域を検出している。箱田氏館跡では、前方後方形周溝墓が検出された。当該期は低地への進出が活発化してきた様相が窺える。中期になると痕跡が希薄になるが、前中西遺跡、藤之宮遺跡、中条遺跡で集落が営まれている。また中条古墳群内の鏡塚古墳、女塚1号墳や奈良古墳群内の横塚山古墳など古墳の築造もみられる。後期に入ると、遺跡数は爆発的な増加がみられ、奈良・平安時代まで継続するものが多い。また、古墳群も群集墳形態のものが各地で築造され、上之古墳群もこの時期に該当する。

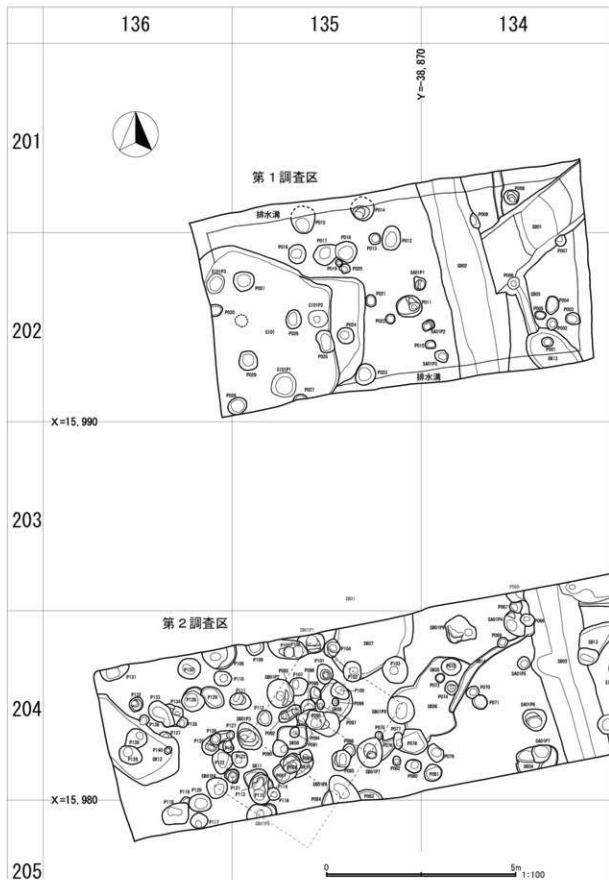
律令体制の始まる奈良・平安時代には、本遺跡周辺は武蔵国幡羅郡または埼玉郡のいずれか属していたと想定される。遺跡は古墳時代後期より継続するものが多く、規模も大きくなる。通常の集落と様相を異にするものがあり、諏訪木遺跡の東部では旧河川で水辺の祭祀の痕跡や、四面庇の大型掘立柱建物跡、軸方向の合う掘立柱建物跡群を検出している。池上遺跡では9世紀代の整列した大型掘立柱建物跡が確認されている。最たるものは、北島遺跡で台形状区画や配列された建物跡がみられ、施釉陶器を数多く検出している。集落のほか、生産地として中条条里遺跡等今も地割の痕跡がみられるものがある。

平安時代末から中世にかけて、武士が台頭する時期であり、成田氏館跡は成田助高から親泰までの館跡とされるほか、久下氏館跡、市田氏館跡、河上氏館跡、箱田氏館跡、熊谷氏館跡等多くの館跡がみられる。また下田町遺跡は河川交通の要衝に営まれた宿と考えられている。しかしながら、中世から近世期は依然として資料が不足し不明な点が多いのが実状である。

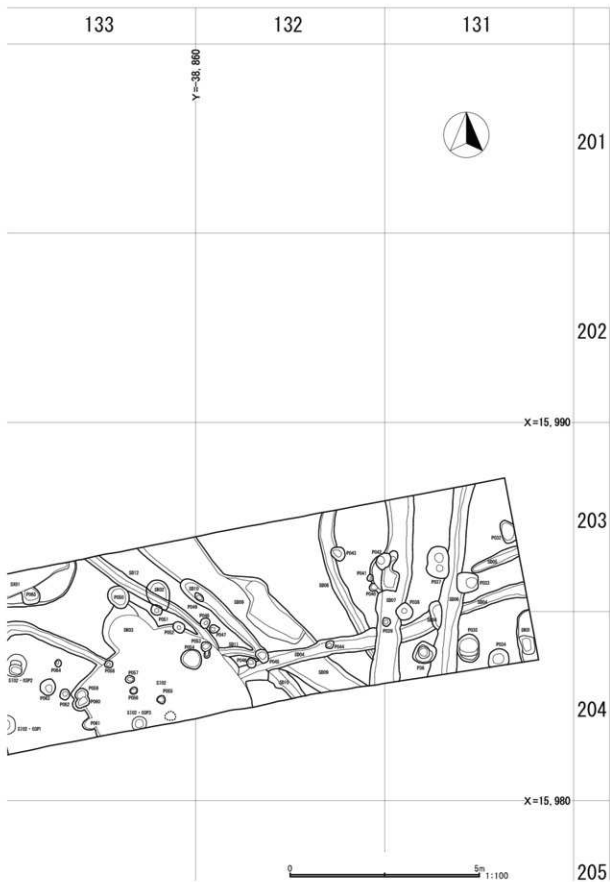
第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	前中西遺跡	弥生中・後古墳 奈良・平安中・近世	16	八幡山遺跡	古墳
2	藤之宮遺跡	弥生中 古墳 奈良・平安中世	17	出口下遺跡	古墳後
3	諏訪木遺跡	縄文後・晩弥生中・後古墳 奈良・平安中・近世	18	熊谷氏館跡	中世
4	箱田氏館跡	平安末～中世	19	宮町遺跡	奈良・平安中世
5	平戸遺跡	弥生中 古墳後 平安中・近世	20	肥塚館跡	中世
6	久下氏館跡	中世	21	出口上遺跡	奈良・平安中・近世
7	市田氏館跡	中世	22	肥塚中島遺跡	奈良・平安 近世
8	成田氏館跡	中世	23	北島遺跡	弥生中・後古墳 奈良・平安中世
9	池上遺跡	弥生中 古墳 平安	24	小敷田遺跡	弥生中 古墳前・後 奈良・平安
10	古宮遺跡	縄文 弥生中 古墳前 奈良・平安中・近世	25	中西遺跡	縄文後・晩弥生中・後古墳 奈良・平安
11	上河原遺跡	奈良・平安中・近世	古墳群		
12	宮の裏遺跡	古墳後	A	上之古墳群	古墳後～末
13	成田遺跡	古墳後	B	肥塚古墳群	古墳後～末
14	中条条里遺跡	古墳前・中 奈良・平安	C	中条古墳群	古墳中期末～後
15	河上氏館跡	中世			

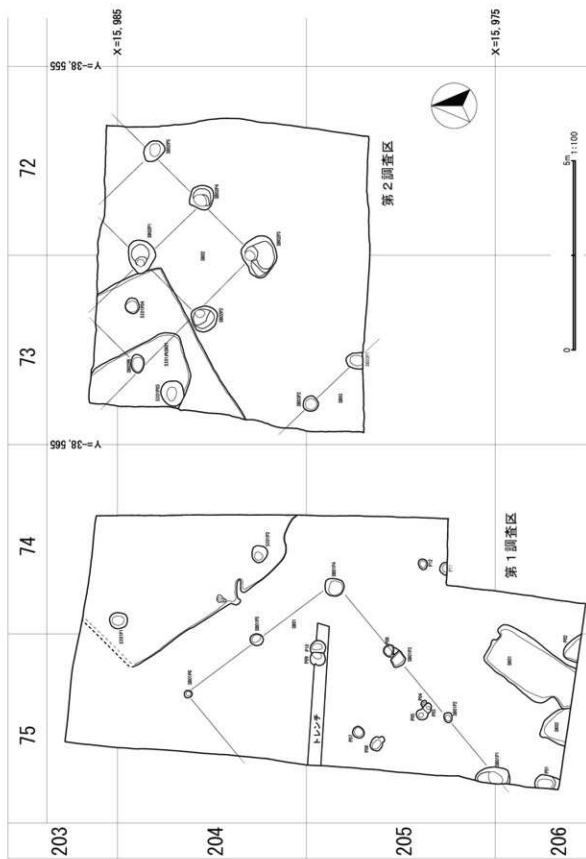




第4図 第1地点全測図(1)



第 5 図 第 1 地点全測図 (2)



第6図 第2地点全測図

III 遺跡の概要

1 調査の方法

今回報告するのは、第4・5図で示す第1地点の第1調査区(分譲住宅)、第2調査区(道路)230.00㎡及び、第6図で示す第2地点の第1・2調査区(分譲住宅)104.34㎡についてである。

発掘調査は、重機により遺構確認面まで表土剥ぎを行った後、下記グリッドの設定を行った。なお座標は、周辺地における過去の調査事例と整合を容易にする為、日本測地系を用いた基準点測量による。グリッド設定後は、人力による遺構確認のための精査を実施し、確認された各遺構は各々手掘りを行った。遺物は必要に応じて写真撮影・実測後、慎重に取り上げを行った。遺構についても必要に応じて写真撮影した後、実測を行った。そして最後に遺構全体の写真撮影を行い調査を終了した。

本報告で示すグリッドについて、過去刊行された『前中西遺跡Ⅱ』(熊谷市教育委員会2002)及び『前中西遺跡Ⅲ』(熊谷市教育委員会2003)において、上之土地区画整理地内全体を一边5mとするグリッドが設定されており、これと同じ設定を用いた。今回報告する調査地点のグリッドについて、第1地点は東西が131～136、南北が201～205である。第2地点は東西が72～75、南北が203～206である。

2 検出された遺構と遺物

第1地点の調査で検出された遺構と遺物は、遺構が堅穴建物跡3軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡14条、土坑13基、柵列跡1条、性格不明遺構1基、ピット138基である。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、石器である。弥生土器、石器は弥生時代のものであり、土師器、須恵器は古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての所産と考えられる。堅穴建物跡は、弥生時代中期後半が1軒、古墳時代後期が2軒検出され、掘立柱建物跡は奈良・平安時代のもを1棟検出した。溝跡は中央から東側にかけて検出された。その大半が時期不明であるが、第9・10・12号溝跡は古墳時代後期と推測される。調査区を南北方向に縦断する大溝(第1号溝跡)は、斜行して連結する第2号溝跡と一体となって機能した水路と推察される。また、第1号柵列跡は第1号溝跡と並行関係にあり、同時期に存在した区画施設と考えられる。土坑は計13基検出し、南側の調査区に集中する傾向がみられた。特にピットが集中する西側にまとまっており、掘立柱建物跡も確認されたことから、柱穴である可能性を含むものが多いといえる。性格不明遺構は堅穴状であるが、部分的検出であり全体像は不明である。ピットは全面に散見されたが、南側の第2調査区の西側は掘立柱建物跡の可能性がある。調査区の微地形と遺構の検出状況から、調査区東側は集落が途切れる箇所と推察される。

第2地点の調査で検出された遺構と遺物は、遺構が堅穴建物跡1軒、掘立柱建物跡3棟、土坑2基、ピット10基である。遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、石器・石製品であり、主体となるのは古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての所産のものと考えられる。時期が判明する遺構は、堅穴建物跡と第1号土坑であり、古墳時代後期に帰属する。そのほかは時期不明であるが、主軸方位等から掘立柱建物跡は、同時存在ではないながらも、あまり時期差の無い遺構と思われる。

IV 遺構と遺物 1

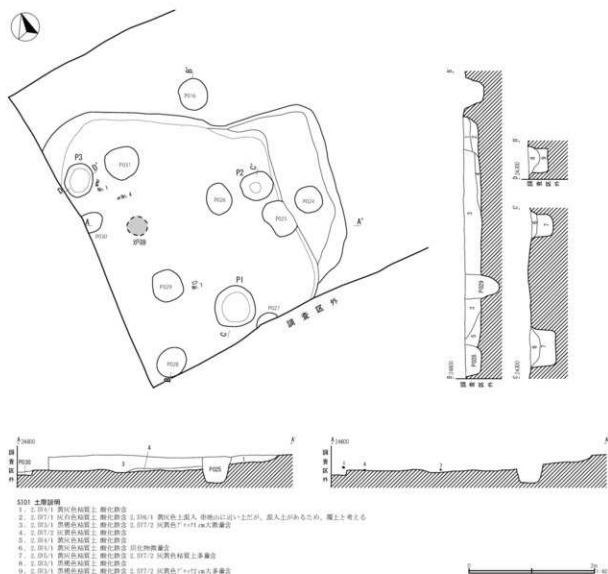
第1地点

1 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡（第7図）

位置 136 - 201 ~ 135 - 202 グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸 4.3 m、拡張を含めない短軸 3.7 m、残存壁高 27 cm を測る。主軸の方位は N - 22° - E を示す。東側に拡張がなされ、長軸 2.6 m、短軸 0.9 m、残存壁高 13 cm を測る。



第7図 第1号竪穴建物跡

概要 およそ西～南側は調査区外であるが、平面形は隅丸方形とみられ、東側に拡張箇所が張り出している。設備として、柱穴3基と炉を検出した。柱穴の平面形は円または楕円形を呈する。直径は50～60cm、深さは30～40cmである。炉跡は直径32cmの焼土範囲として検出した。

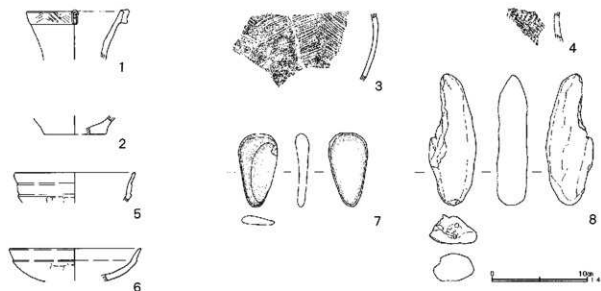
重複 本遺構はP 24～31と重複し、本遺構が古い。

遺物（第8図、第2表）

弥生土器壺、甕、土師器環、磨石、叩石等を検出した。

1～4は弥生土器で、1は壺の口縁部である。折り返し口縁の外面にRL単節縄文が施され、縦長で中央が窪む突起が貼付されている。2は底部片。3は甕の胴部片で、外面に6本1単位の櫛歯状工具による羽状文が縦位に施されている。4は壺の頸部下半片か。3本1単位の櫛歯状工具による2条の刺突列が施され縄文が充填されている。5・6は土師器環で流れ込みである。5は有段口縁部で直立気味の口縁部が中ほどで外傾する。6は口縁部が開く坏蓋換飯坏。7は砂岩製の扁平な磨石。8は結晶片岩製の叩石で片面に使用痕がみられた。

時期 弥生時代中期後半



第8図 第1号竪穴建物跡出土遺物

第2表 第1号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器壺	(10.7)	(5.15)	-	ARCHIN	外面：にじみ黄棕色 内面：灰黄棕色	B	口縁部30%	口縁部に縄文施文と縦長の突起の貼付文
2	弥生土器片	-	(2.0)	(6.6)	ASH	外面：黄棕色 内面：にじみ黄棕色	B	底部20%	内外面磨粒顕著
3	弥生土器壺	-	-	-	ARCHIN	黒褐色	B	胴部片	外面縦位の羽状文、内外面磨粒
4	弥生土器壺	-	-	-	ARCHIN	外面：にじみ黄棕色 内面：黒灰色	B	胴部片	二条の刺突列間に縄文充填
5	土師器環	(12.7)	(3.2)	-	ASH	外面：灰黄棕色 内面：にじみ黄棕色	B	10%	
6	土師器環	(13.8)	3.4	-	ARCH	棕色	B	5%	北式輪型作
7	磨石	高 7.7	幅 4.1	厚 1.4			100%		砂岩製 重量 41g
8	叩石	高 13.85	幅 3.0	厚 3.25			60%		結晶片岩製 重量 287g

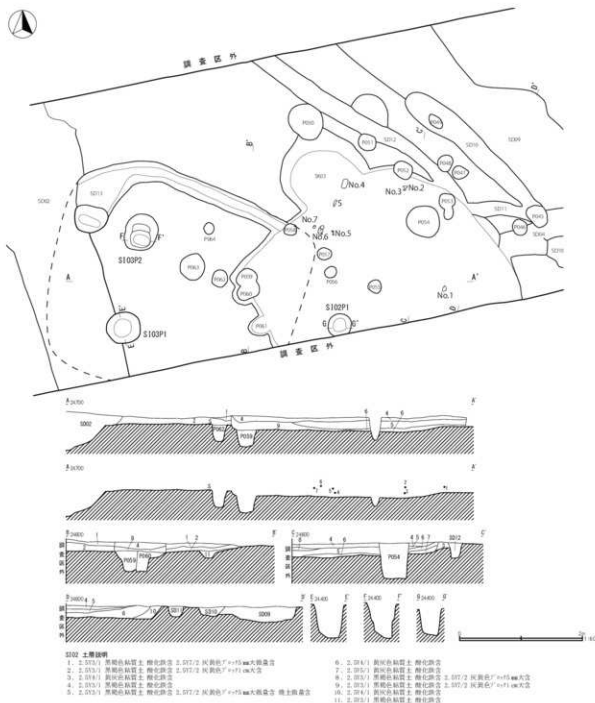
第2号竪穴建物跡（第9図）

位置 133-203 ~ 132-204 グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸4.1 m、短軸2.8 m、残存壁高24 cmを測る。主軸の方位はN-34°-Wを示す。

概要 南側は調査区外であるが、平面形は縦ね方形を呈する。設備として、柱穴1基を検出した。カマドは第3号土坑により破壊されていると判断される。柱穴は円形で、直径は37 cm、深さは43 cmである。

重複 本遺構は第3号竪穴建物跡、第3号土坑、第4・11・12号溝跡、P 52 ~ 61と重複する。本遺構は、



第9図 第2・3号竪穴建物跡

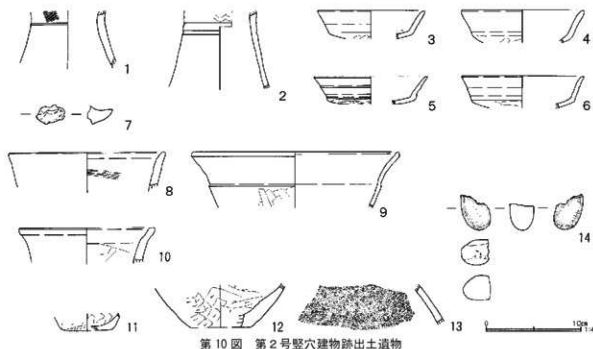
第3号土坑、第4・11・12号溝跡、P 52～61より古く、第3号竪穴建物跡より新しい。

遺物（第10図、第3表）

弥生土器壺、土師器坏、甗、鉢、壺、甕、叩石等を検出した。

1・2は弥生土器壺の頸部片で、流れ込みの遺物と判断される。1は一条の沈線が廻り、上部に縄文が施文される。2は上部に波状文を施し、以下に2条の沈線が廻る。3～6は土師器坏である。口縁部が大きく開く形状であり、3・4・6は坏蓋模倣坏、5は有段口縁坏である。7・8は土師器甗である。7は胴部に付される取手部片。8は直線的に外傾する口縁部片である。9は土師器鉢である。口縁と胴部の境界が軽くくびれ、口縁部はゆるく外反しながら伸びる。10は土師器壺で肥厚し外反する口縁部片である。11・12・13は土師器で甕とみられる。11・12は底部片で、11は小型、12は大型の底部である。13は胴部片。14は砂岩製叩石の先端部片である。先端部には使用痕がみられた。

時期 7世紀第3四半期



第10図 第2号竪穴建物跡出土遺物

第3表 第2号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	弥生土器壺	-	(6.1)	-	ABGN	黄灰色	B	破損 10%	胴部縄文施文と沈線一条
2	弥生土器壺	-	(8.3)	-	ABIN	外面：灰黄色 内面：黄灰色	B	破損 30%	胴部波状文と沈線二条
3	土師器坏	(11.2)	(3.0)	-	ACB	上赤・黄棕色	B	25%	
4	土師器坏	(12.8)	(3.2)	-	ACB	黄棕色	B	10%	
5	土師器坏	(11.9)	(2.9)	-	ABEJN	外面：上赤・褐色 内面：灰棕色	B	10%	
6	土師器坏	(12.8)	(3.4)	-	ABG	外面：上赤・褐色 内面：上赤・褐色	B	2%	
7	土師器甗	(2.0)	(3.0)	-	ABE	上赤・黄棕色	B	取手部	
8	土師器甗	(16.4)	(4.2)	-	ABIN	棕色	B	口縁部 10%	
9	土師器鉢	(21.6)	(3.95)	-	D	灰白色	B	口縁部 10%	
10	土師器壺	(14.2)	(3.85)	-	ABCM	上赤・棕色	B	口縁部 10%	
11	土師器甕	-	(1.8)	(5.2)	ABIN	外面：赤棕色 内面：上赤・白色	B	破損 70%	
12	土師器甕	-	(4.5)	(6.4)	ABIK	外面：明赤褐色 内面：棕色	B	破損 30%	
13	土師器甕	-	-	-	ABJN	外面：上赤・黄棕色 内面：黄棕色	B	胴部片	
14	叩石	高 (3.8)	幅 (3.2)	厚 2.6				先端部	砂岩製 重量 26g 片端使用

第3号竪穴建物跡（第9図）

位置 134 - 203 ~ 133 - 204 グリッドに位置する。

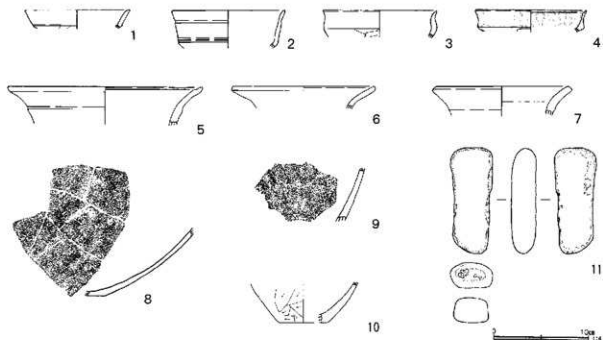
規模 検出範囲で長軸3.7 m、短軸3.1 m、残存壁高11 cmを測る。主軸の方位はN-25°-Wを示す。

概要 南側は調査区外、東・西側は重複する遺構に切られ、平面形も含めて不明な点が多い。北東側の壁面のみ遺存している。平面図に付した破線は、調査環境の影響で断面の把握が困難であったため、最小規模を想定したものである。また、第13号溝跡は本遺構の壁溝の可能性が高いが、念のため溝跡としての遺構番号を付した。設備として、柱穴2基を検出した。カマドの位置は不明である。柱穴は円または楕円形を呈し、直径は55 ~ 60 cm、深さは55 cmである。

重複 本遺構は第2号竪穴建物跡、第2・13号溝跡、P 58 ~ 64と重複する。本遺構は、第2号竪穴建物跡、第2号溝跡、P 58 ~ 64より古い。第13号溝跡との時期差は見出せなかった。

遺物（第11図、第4表）

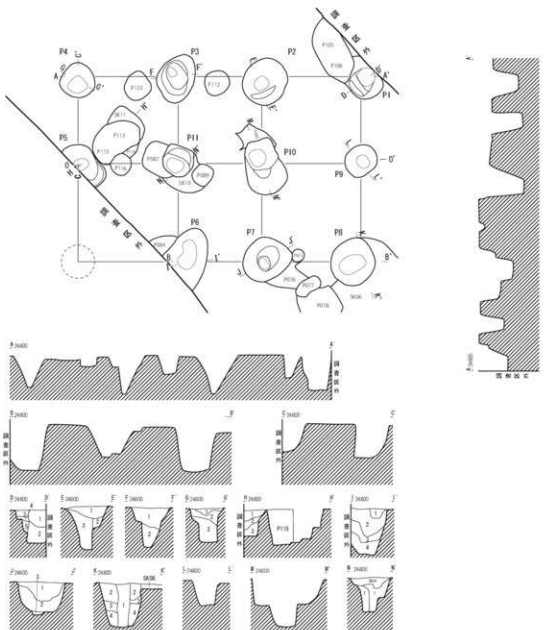
土師器坏、壺、甕、叩石等を検出した。



第11図 第3号竪穴建物跡出土遺物

第4表 第3号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器坏	(11.0)	(2.0)	-	AREN	外面：棕色 内面：12.5A-棕色	B	5%	
2	土師器坏	(11.8)	(4.0)	-	ARJ	外面：赤褐色 内面：12.5A-黄棕色	B	20%	
3	土師器坏	(12.0)	(2.9)	-	ARCD	赤褐色	B	10%	
4	土師器坏	(11.6)	(2.35)	-	AREK	赤色	B	5%	内外面赤部有り
5	土師器甕	(20.2)	(4.1)	-	ARETK	棕色	B	口縁部 50%	
6	土師器甕	(18.0)	(2.4)	-	BDG	外面：12.2A-棕色 内面：浅黄棕色	B	口縁部 10%	
7	土師器甕	(12.9)	(3.1)	-	BR	灰白色	B	口縁部 10%	
8	土師器壺	-	-	-	AREXN	外面：12.5A-黄棕色 内面：棕色	B	破断片	
9	土師器甕	-	-	-	AJENQ	外面：黄灰色 内面：12.5A-黄棕色	B	破断片	
10	土師器甕	-	(4.3)	(0.2)	ARJ	外面：赤褐色 内面：12.5A-黄褐色	B	破断 30%	
11	叩石	高 11.1	幅 4.5	厚 2.0				100%	砂岩製 重量 206g



P1 土壤說明 (B—B')

1. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
2. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r2$ cm 大土
3. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
4. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
5. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土

P2 土壤說明 (E—E')

1. 2. 313/1 黃褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r2$ cm 大土
2. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
3. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土

P3 土壤說明 (F—F')

1. 2. 313/1 黃褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
2. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
3. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土

P4 土壤說明 (G—G')

1. 2. 313/1 黃褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
2. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
3. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土

P5 土壤說明 (H—H')

1. 2. 313/1 黃褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
2. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
3. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土

P6 土壤說明 (I—I')

1. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
2. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
3. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
4. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土

P7 土壤說明 (J—J')

1. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
2. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
3. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土

P8 土壤說明 (K—K')

1. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
2. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
3. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
4. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土

P11 土壤說明 (M—M')

1. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土
2. 2. 313/1 深褐色粘質土 礫化跡象 2. 317/2 灰黃色 $r''=r1$ cm 大土

第 12 圖 第 1 号掘立柱建筑物

1～4は土師器坏である。1・2は坏蓋摸倣坏である。1は口縁部が大きく開く形状であり、2は幅広い口縁部が軽く開く形状である。3・4は口縁部が「S」字状に屈曲する比企型坏である。4は内外面が赤彩されている。5～7は土師器甕または壺の口縁部片である。5は口縁部が水平近くまで開き、口端が軽く直立する。6は薄手、7は肥厚する。8～10は土師器壺・甕の胴～底部片である。8は胴張形状となる壺である。9・10は甕である。11は砂岩製の叩石で片端に使用痕がみられた。

時期 7世紀第2四半期か

2 掘立柱建物跡

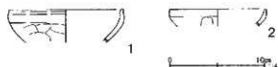
第1号掘立柱建物跡(第12図)

位置 135-203・204、134-204グリッドに位置する。

概要 2間×3間となる南北棟の総柱建物跡である。梁行は3.0m、桁行は推定で4.4mを測り、推定面積は13.2㎡となる。柱間は、梁行が西から1.4m-1.6mである。桁行が北から1.5m-1.3m-1.6mを測る。主軸方位はN-34°-Eである。柱穴掘方は概ね円形を呈するものとみられるが、重複等の影響で乱れている。長径は60～80cmであり、深さは確認面から65～85cmである。

遺物(第13図、第5表)

1・2は土師器で北武蔵型坏である。口縁が内湾し、ケズリの位置が高く丸底となるもの。



重複 第6・7号土坑と重複する。本遺構は第7号土坑より古く、第6号土坑より新しい。

時期 7世紀末～8世紀初頭

第13図 第1号掘立柱建物跡出土遺物

第5表 第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器坏	(11.7)	(3.5)	-	ABT	橙色	B	10%	P9より出土
2	土師器坏	(10.0)	(1.8)	-	AB	橙色	B	5%	P9より出土

3 溝跡

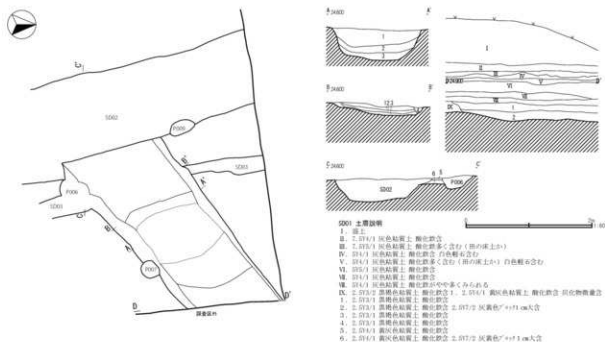
第1号溝跡(第14図)

位置 134-202・203グリッドに位置する。

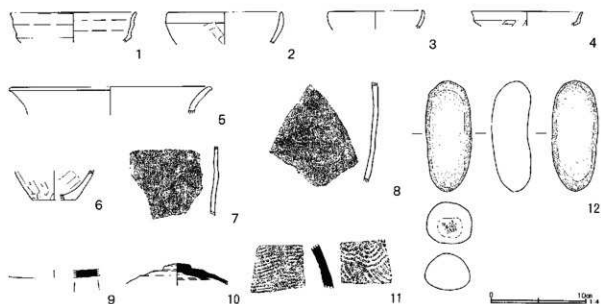
規模 検出範囲で長さ3.3m、幅1.3～1.5m、深さ15～47cmを測る。走行軸の方位はN-52°-Wを示す。

概要 北東-南西方向へ流れる大溝で、断面形は逆台形を呈する。第2号溝跡と一体となって機能していたと考えられる。中程が深くなっているが、第2号溝跡との連結箇所が浅くなっている。P7～9は本遺構に架けられていた橋の橋脚の痕跡の可能性が有る。第2号溝跡と並行する第1号柵列跡が、本遺構の連結箇所で途切れることから、用水路の機能以外に区画施設としての性質を備えていた可能性が考えられる。

重複 第2・3号溝跡、P6・7と重複する。本遺構は第3号溝跡より古い。第2号溝跡、P6・7に



第 14 図 第 1 号溝跡



第 15 図 第 1 号溝跡出土遺物

第 6 表 第 1 号溝跡出土遺物観察表

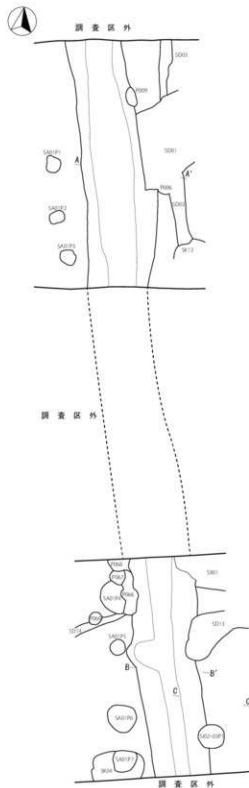
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土製蹄環	(13.2)	2.1	-	AD8H	シロ・棕色	B	10%	
2	土製蹄環	(12.0)	(3.4)	-	AD1X	棕色	B	10%	
3	土製蹄環	(10.0)	(3.9)	-	AD1X	棕色	B	10%	
4	土製蹄環	(11.6)	(1.5)	-	AD1C	棕色	B	10%	
5	土製蹄環	(20.9)	(2.9)	-	AD8K	シロ・棕色・棕色	B	口縁部 10%	
6	弥生土器遺片	-	(3.15)	(4.4)	BN	黒褐色	B	底面 20%	内外面磨削面
7	土製蹄環	-	-	-	AD8H	シロ・棕色	B	破断片	
8	土製蹄環	-	-	-	AD1K	内面: シロ・棕色 外面: 黄褐色	B	破断片	
9	土製蹄環	-	-	(9.7)	AD1X	灰色	A	破断片	南江全産 底面外面磨削ヘラタズリ
10	土製蹄環	-	(2.3)	-	AD	灰白色・灰黄褐色	A	20%	東高産 外面磨削 ボタン状つまみ
11	土製蹄環	-	-	-	AD1	灰色	A	破断片	未詳産 内面同心円状あて具板 外面平行タタキ
12	燧石	長 11.7	幅 4.8	厚 3.9				100%	砂岩製 重量 205g

切られるが、覆土は概ね同様であり、ほとんど時期差がないと判断される。

遺物（第15図、第6表）

弥生土器壺、土師器環、甕、須恵器環、蓋、甕、叩石等を検出した。

1～4は土師器環である。1は有段口縁環、2・3は北武蔵型環で、2は丸底を呈する。4は比企型



環の口縁部片である。5は土師器甕の口縁部片で「く」字状に外反する。6は弥生土器壺または甕の底部片で流れ込みである。7・8は土師器甕の胴部片。9は須恵器環の底部片で、南比企産である。外面にヘラケズリが施されている。10は東海産の須恵器蓋である。ボタン状つまみが付され、外面に釉薬が施されている。流れ込みか。11は須恵器甕の胴部片で外面に平行タタキ、内面に同心円状の青海波当て具の痕跡がみられる。12は砂岩製叩石で、流れ込みである。

時期 7世紀後半～8世紀初頭

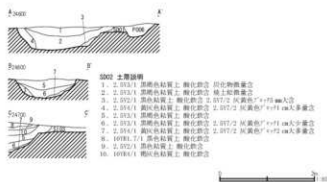
第2号溝跡（第16図）

位置 135-201～133-204グリッドに位置する。

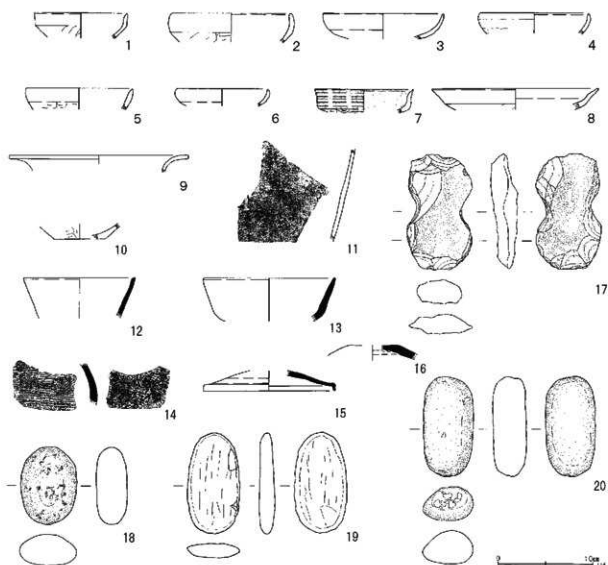
規模 検出範囲で長さ15.8m、幅1.1～1.5m、深さ48cmを測る。走行軸の方位はN-17°-Eを示す。

概要 第1・2調査区にまたがって検出された。ほぼ南北方向へ流れる大溝で、断面形は逆台形を呈する。第1号溝跡と一体となって機能していたと考えられる。本遺構の西側に並行する第1号柵列跡が、第1号溝跡の連結箇所と途切れることから、用水路の機能以外に区画施設としての性質を備えていた可能性が考えられる。

重複 第3号竪穴建物跡、第1・13号溝跡、第1号性格不明遺構、P9・66・68と重複する。本遺構はP66・68



第16図 第2号溝跡



第 17 图 第 2 号溝跡出土遺物

第 7 表 第 2 号溝跡出土遺物觀察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土器器坪	(9.7)	(2.4)	-	AE1	じぶい褐色	B	10%	
2	土器器坪	(12.4)	(3.4)	-	BE5	褐色	B	10%	
3	土器器坪	(12.7)	(2.4)	-	K	じぶい黄褐色	B	10%	
4	土器器坪	(11.5)	(2.2)	-	AEK	褐色	B	10%	
5	土器器坪	(11.2)	(2.2)	-	AECHIN	褐色	B	10%	
6	土器器坪	(9.4)	(1.8)	-	AE5	褐色	B	10%	
7	土器器坪	(10.3)	(2.5)	-	AECHIN	明赤褐色	B	10%	内外面赤絵有り
8	土器器底	(17.4)	(2.2)	-	BEK	じぶい褐色	B	10%	
9	土器器底	(16.4)	(1.7)	-	AEEN	じぶい褐色	B	口縁部 20%	
10	土器器底	-	(1.4)	(3.4)	AEIK	外面：褐色 内面：じぶい黄褐色	B	底面 20%	
11	土器器底	-	-	-	AEIKEN	褐色	B	胴部片	
12	黄鉄器坪	(11.4)	(4.3)	-	AE5	外面：灰白色 内面：灰褐色	B	底	
13	黄鉄器坪	(14.0)	(4.4)	-	AE5	外面：點灰色 内面：黄灰色	C	10%	
14	黄鉄器底	-	-	-	AE5	灰色	A	胴部片	内外面赤絵 外面方半目
15	黄鉄器底	(13.7)	(2.2)	-	A	灰色	B	30%	内比全産
16	黄鉄器底	-	(1.4)	-	AE	灰色	B	10%	
17	打製石片	高 12.0	幅 8.7	厚 2.6			100%	粘板岩製 重量 200g	
18	磨石	高 8.2	幅 3.3	厚 3.3			100%	燧石製 重量 220g	
19	磨石	高 10.7	幅 5.5	厚 1.5			100%	燧石片製 重量 140g	
20	磨石	高 16.5	幅 5.3	厚 3.6			100%	閃緑岩製 重量 330g	

より古く、第3号竪穴建物跡、第13号溝跡、第1号性格不明遺構より新しい。第1号溝跡、P9を切るが、覆土は概ね同様であり、ほとんど時期差がないと判断される。

遺物（第17図、第7表）

土師器坏、皿、甕、須恵器坏、壺、蓋、打製石斧、磨石、叩石等を検出した。

1～7は土師器坏である。1は口縁部が直立する坏蓋模倣坏または口端部がやや屈曲しており比企型坏か。2～6は北武蔵型坏で、口縁部が内湾または直立するもの。7は比企型坏で内外面に赤彩が施される。8は皿で口縁部が大きく開き口端が水平気味に外傾する形状。9～11は土師器甕。9は口縁部が水平方向に開く。10は底部片で、11は胴部片である。12・13須恵器坏である。体部が直線的に外傾し、器高が高い。14は須恵器壺の肩部片である。外面にカキ目が施され、内面に当て具痕がみられる。15・16は須恵器蓋である。17～19は石器で、流れ込みである。17は粘板岩製の打製石斧である。18・19は磨石で、18は閃緑岩製、19は結晶片岩製で扁平な形状である。20は閃緑岩製の叩石である。

時期 7世紀後半～8世紀初頭

第3号溝跡（第18図）

位置 134 - 201・202 グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長さ4.4 m、幅0.3 m、深さ15 cmを測る。走行軸の方位はN - 15° - Wを示す。

概要 南北方向へ流れる溝で、断面形は逆台形を呈する。南北方向ともに調査区外となり延長は不明。

重複 第1号溝跡、第13号土坑、P6と重複する。本遺構は第13号土坑より古く、第1号溝跡、P6より新しい。

遺物 遺物は検出されなかった。

時期 時期不明だが、7世紀後半以降である。

第4号溝跡（第18図）

位置 131 - 203 ~ 132 - 204 グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長さ8.1 m、幅0.3 ~ 0.5 m、深さ22 cmを測る。走行軸の方位はN - 72° - Eを示す。

概要 東西方向へ流れる溝で、断面形は逆台形を呈する。東側は調査区外となり延長は不明。西側は深度が浅くなり、第2号竪穴建物跡上で途切れる。

重複 第2号竪穴建物跡、第6・7・8・9・10号溝跡、P44・45と重複する。本遺構は第2号竪穴建物跡、第6・7・8・9・10号溝跡、P44・45より新しい。

遺物（第20図、第8表）

流れ込みの弥生土師器の胴部片を検出した。

時期 時期不明である。

第5号溝跡（第18図）

位置 131 - 203 グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長さ1.3 m、幅0.3 m、深さ10 cmを測る。走行軸の方位はN - 66° - Eを示す。

概要 東西方向へ流れる溝で、断面形は逆台形を呈する。東側は調査区外となり延長は不明。西側は深度が浅くなり途切れる。

重複 重複する遺構はない。

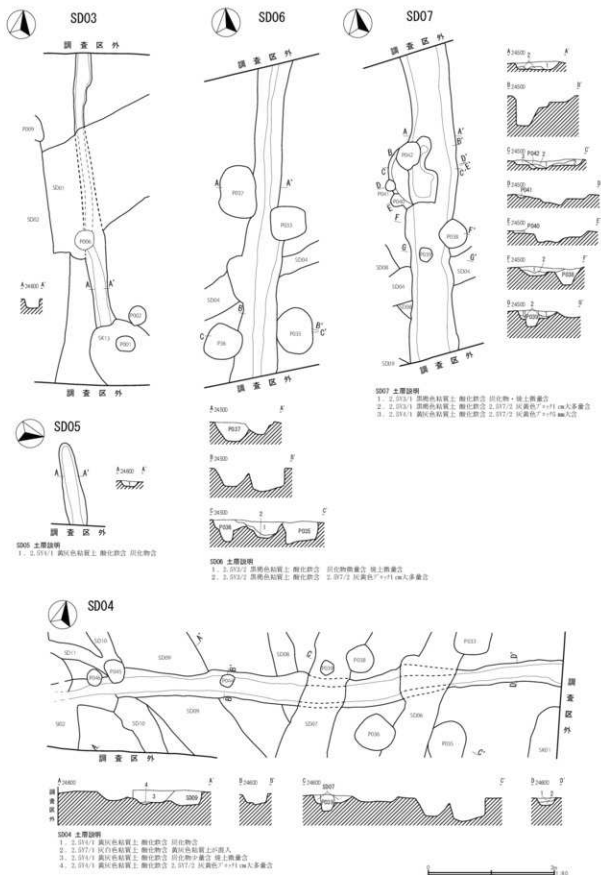
遺物（第20図、第8表）

土師器坏、甕及び叩石が出土した。1・2は土師器。1は坏身模倣坏で内外面に赤彩が施される。2は甕の底部片。3は砂岩製の叩石で流れ込みである。

時期 7世紀前半か

第6号溝跡（第18図）

位置 131 - 203・204 グリッドに位置する。



第 18 圖 第 3~7 号溝跡

規模 検出範囲で長さ5.0m、幅0.4～0.7m、深さ25cmを測る。走行軸の方位はN-6°-Wを示す。

概要 南北方向へ流れる溝で、断面形は逆台形を呈する。南北方向とも調査区外となり延長は不明。走行方向は第7号溝跡に並行している。

重複 第4号溝跡、P33・35・36・37と重複する。本遺構は第4号溝跡より古く、P33・35・36・37より新しい。

遺物 (第20図、第8表)

土師器壺、甕が出土した。1は壺で、坏蓋模倣坏である。2は甕の胴部片である。

時期 7世紀中頃

第7号溝跡 (第18図)

位置 131-203～132-204グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長さ4.9m、幅0.6～0.8m、深さ7～17cmを測る。走行軸の方位はN-3°-Wを示す。

概要 南北方向へ流れる溝で、断面形は逆台形を呈する。南北方向とも調査区外となり延長は不明。走行方向は第6号溝跡に並行している。

重複 第4号溝跡、P38・39・40・41・42と重複する。本遺構は第4号溝跡、P39・40より古く、P38・41・42より新しい。

遺物 (第20図、第8表)

叩石及び土師器甕が出土したがいずれも流れ込みか。1は礫岩製の叩石で、断面形状が長方形である。2は土師器甕の胴部片である。

時期 時期不明である。

第8号溝跡 (第19図)

位置 132-203・204グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長さ4.0m、幅0.4m、深さ12cmを測る。走行軸の方位はN-20°-Wを示す。

概要 南-北東方向へ緩やかな弧を描いて流れる溝で、断面形は逆台形を呈する。北側は調査区外となり、南側は第7号溝跡に切られ延長は不明。

重複 第4・7号溝跡、P43と重複する。本遺構は第4・7号溝跡より古く、P43より新しい。

遺物 遺物は検出されなかった。

時期 時期不明である。

第9号溝跡 (第19図)

位置 133-203～132-204グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長さ6.3m、幅1.2～0.8m、深さ12～24cmを測る。走行軸の方位はN-50°-Eを示す。

概要 北西-南東方向へ流れる溝で、断面形は箱形を呈する。南北方向は調査区外となり、延長は不明である。

重複 第4・10号溝跡と重複し、本遺構が古い。

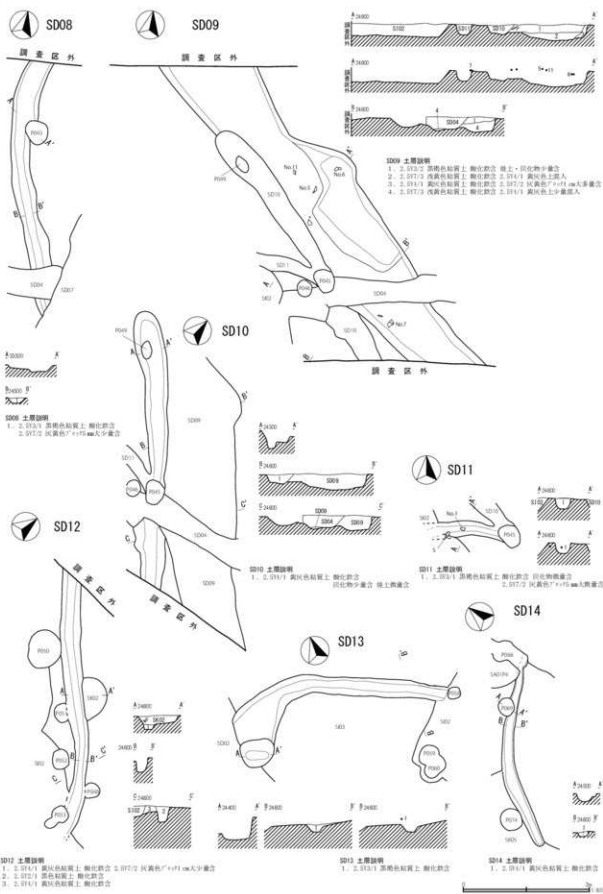
遺物 (第20図、第8表)

土師器壺、甕、須恵器壺、甕、叩石、弥生土器壺、甕等を検出した。1～3は土師器壺である。1は坏身模倣坏、2は有段口縁坏、3は坏蓋模倣坏である。4～8は土師器甕である。4は口縁が外に開く長胴甕。5・6は直立気味の口縁が外反する形状の甕または壺か。7は胴部片。8は底部片である。9は須恵器で坏身である。10・11は須恵器甕である。10は頸部片。11は胴部片で外面に平行叩き、内面に同心円状の当て具痕がみられる。12は頁岩製の叩石である。13・14は弥生土器。13は甕の胴部片で、外面に3条の沈線がみられる。14は壺とみられる底部片。

時期 7世紀前半

第10号溝跡 (第19図)

位置 133-203～132-204グリッドに位置する。



第 19 圖 第 8 ~ 14 号溝跡

規模 検出範囲で長さ4.0 m、幅0.4 m、深さ12 cmを測る。走行軸の方位はN-45°-Wを示す。

概要 南-北東方向へ緩やかな弧を描いて流れる溝で、断面形は逆台形を呈する。北側は調査区外となり、南側は第7号溝跡に切られ延長は不明。

重複 第4・9号溝跡、P 45・49と重複する。本遺構は第4号溝跡より古く、第9号溝跡より新しい。P 45・49との時期差は不明である。

遺物 遺物は検出されなかった。

時期 時期不明である。

第11号溝跡 (第19図)

位置 132-204グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長さ0.9 m、幅0.2 m、深さ16 cmを測る。走行軸の方位はN-85°-E。

概要 東-西方向へ流れる溝で、断面形はU字形を呈する。西側は第2号竪穴建物跡上で途切れ、東側は第10号溝跡、P 45と重複し、延長は不明。

重複 第10号溝跡、P 45と重複する。本遺構と第10号溝跡、P 45との時期差不明。

遺物 (第20図、第8表)

流れ込みとみられる土師器甕を検出した。1は胴部片である。

時期 時期不明である。

第12号溝跡 (第19図)

位置 133-203~132-204グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長さ4.2 m、幅0.3 m、深さ22 cmを測る。走行軸の方位はN-55°-W。

概要 北西-南東方向へ流れる溝で、断面形は箱形を呈する。北側は調査区外となり、南側は第2号竪穴建物跡と重複し、延長は不明である。

重複 第2号竪穴建物跡、第2号土坑、P 48・51・53と重複する。本遺構は第2号土坑、P 51より古く、P 48・53より新しい。

遺物 (第20図、第8表)

土師器甕が出土した。1は口縁部片である。

時期 7世紀第3四半期

第13号溝跡 (第19図)

位置 133・134-204グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長さ3.3 m、幅0.7~0.3 m、深さ11 cmを測る。走行軸の方位はN-67°-Wを示す。

概要 西南-北東方向へ流れる溝で、133-134グリッドの境付近で屈曲し幅も広がりピット状の落ち込みがある。断面形は逆台形を呈する。東側は第2号竪穴建物跡に切られ、西側は第2号溝跡に切られ延長は不明だが、第14号溝跡につながる可能性がある。また、第3号竪穴建物跡の壁溝の可能性があるが、溝跡としても記載しておく。

重複 第2号竪穴建物跡、第2号溝跡と重複し、本遺構が古い。

遺物 遺物は検出されなかった。

時期 6世紀末~7世紀中頃

第14号溝跡 (第19図)

位置 134-204グリッドに位置する。

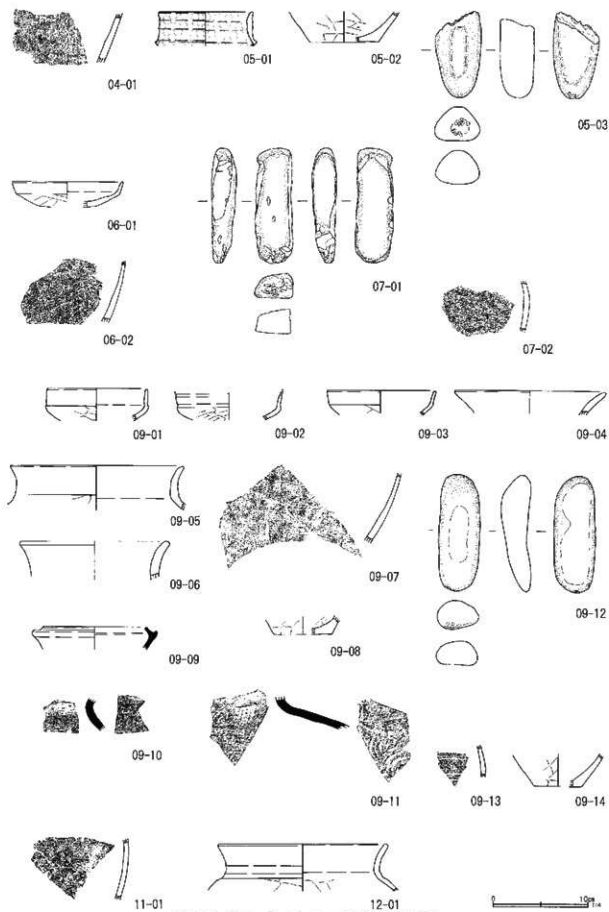
規模 検出範囲で長さ3.0 m、幅0.2 m、深さ12 cmを測る。走行軸の方位はN-43°-E。

概要 北東-南西方向へ流れる溝で、断面形は逆台形を呈する。東側は第2号溝跡に切られ、西側は第6号土坑内で途切れ延長は不明である。

重複 第2号溝跡、第5・6号土坑、第1号柵列、P 66・69と重複する。本遺構は第2号溝跡、第5・号土坑、第1号柵列、P 69より古く、P 66より新しい。

遺物 遺物は検出されなかった。

時期 時期不明である。



第 20 圖 第 4 ~ 7 · 9 · 11 · 12 号溝跡出土遺物

第8表 第4～7・9・11・12号溝跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
04-01	弥生土器甕	-	-	-	ABDJKN	外面：黄灰色 内面：灰黄褐色	B	破断片	内外面磨耗
05-01	土師器杯	(10.0)	(3.4)	-	ABDJKK	赤色	B	20%	内外面赤彩有り
06-02	土師器甕	-	(3.3)	(7.2)	ABDF	外面：灰褐色 内面：黒灰色	B	破断 20%	
06-03	印石	高 (9.1)	幅 (4.8)	厚 (3.6)	-	-	-	70%	破断製 重量 216g
06-01	土師器杯	(11.5)	(2.7)	-	BE	外面：にじみ・褐色 内面：棕色	B	30%	
06-02	土師器甕	-	-	-	IK	外面：黒色 内面：にじみ・黄棕色	B	破断片	
07-01	印石	高 12.0	幅 4.0	厚 3.6	-	-	-	95%	破断製 重量 198g
07-02	土師器甕	-	-	-	ABEIN	外面：灰褐色 内面：灰黄褐色	B	破断片	
09-01	土師器杯	(10.4)	(3.4)	-	ABDKK	黒灰色	B	20%	
09-02	土師器杯	(11.3)	(3.0)	-	ABDT	棕色	B	10%	
09-03	土師器杯	(11.3)	(2.5)	-	ABDF	にじみ・黄褐色	B	20%	
09-04	土師器甕	(15.8)	(2.2)	-	ABDJKN	にじみ・棕色	B	口縁部 20%	
09-05	土師器甕	(16.2)	(4.6)	-	ABDJKN	にじみ・黄棕色	B	口縁部 20%	
09-06	土師器甕	(15.5)	(4.1)	-	ABDJK	外面：灰黄褐色 内面：にじみ・黄棕色	B	口縁部 10%	
09-07	土師器甕	-	-	-	ABDJKN	外面：棕色 内面：黒褐色	B	破断片	
09-08	土師器甕	-	(1.9)	(6.0)	ABDF	にじみ・棕色	B	破断 20%	
09-09	須恵器杯身	(10.0)	(2.4)	-	ABN	灰白色	B	15%	
09-10	須恵器甕	-	-	-	ABJ	灰色	B	破断片	
09-11	須恵器甕	-	-	-	AC	灰色	B	破断片	内面同心円状あて具痕 外面平行タタキ
09-12	印石	高 12.4	幅 4.4	厚 3.0	-	-	-	100%	破断製 重量 248g
09-13	弥生土器甕	-	-	-	ABDIN	黒褐色	B	破断片	外面横位の沈跡あり
09-14	弥生土器甕	-	(3.4)	(5.0)	ABDF	外面：明褐色 内面：黒灰色	B	破断 20%	
11-01	土師器甕	-	-	-	ABDJKN	外面：にじみ・黄褐色 内面：黒褐色	B	破断片	
12-01	土師器甕	(17.6)	(5.0)	-	ABN	外面：にじみ・黄棕色 内面：灰黄褐色	B	口縁部 20%	

4 土坑

第1号土坑 (第21図)

位置 131 - 203・204 グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸 1.3 m、短軸 0.4 m、深さ 10 ~ 23 cm を測る。

概要 平面形は楕円形状とみられ、東・南側が調査区外となり全容は不明である。西壁沿いにピット状の落ち込みがみられた。

重複 重複する遺構はない。

遺物 遺物は検出されなかった。

時期 時期不明である。

第2号土坑 (第21図)

位置 133 - 203 グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸 0.8 m、短軸 0.6 m、深さ 12 cm を測る。

概要 平面形は楕円形状である。小規模な土坑であったが、良好な遺物を検出した。

重複 第12号溝跡、P 51 と重複する。本遺構は第12号溝跡より新しく、P 51 より古い。

遺物 (第22図、第9表)

土師器杯・鉢・甕が出土した。1は土師器杯で坏蓋摸倣坏である。3は土師器鉢で、口縁部と体部の境は段がみられる。口縁部はナデにより調整され圧痕が廻る。体〜底部はケズリにより調整されている。2、4〜6は土師器甕である。2は底部片、4は口縁部片、5・6は胴部片である。

時期 7世紀後半

第3号土坑 (第21図)

位置 133 - 203・204 グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸 1.3 m、短軸 1.0 m、深さ 20 cm を測る。

概要 平面形は円または楕円形状とみられる。第

2号堅穴建物跡北壁に位置し、本遺構がカマドを壊している可能性がある。

重複 第2号堅穴建物跡、P 50と重複する。本遺構はP 50より古く、第2号堅穴建物跡より新しい。

遺物 遺物は検出されなかった。

時期 時期不明である。

第4号土坑（第21図）

位置 134 - 204グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸1.1m、短軸0.6m、深さ5～27cmを測る。

概要 平面形は隅丸形状か。南側を調査区外で欠く。形状からは、柱穴掘方のようにみえるが、関連柱穴を含め全容が不明なため土坑として取り扱った。

重複 第1号掘立柱建物跡と重複し、本遺構が新しい。

遺物 遺物は検出されなかった。

時期 時期不明である。

第5号土坑（第21図）

位置 134・135 - 204グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸1.5m、短軸1.2m、深さ4cmを測る。

概要 平面形は楕円～隅丸長方形とみられ、東側を第14号溝跡に切られる。

重複 第6号土坑、P 72・73・74と重複する。本遺構は第6号土坑、P 72・73・74より新しい。

遺物（第22図、第9表）

土師器甕、須恵器蓋が出土した。1～3は土師器甕で、1は口縁部が水平方向に開き、胴部には縦位のヘラケズリが施される。2は胴部片、3は底部片である。4は須恵器蓋である。

時期 7世紀後半

第6号土坑（第21図）

位置 134・135 - 204グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸1.4m、短軸1.3m、深さ6cmを測る。

概要 平面形は隅丸形状とみられ、北東側を第5号土坑に切られる。

重複 第1号掘立柱建物跡、第5号土坑、P 78と重複する。本遺構は第1号掘立柱建物跡、第5号土坑より古く、P 78より新しい。

遺物 遺物は検出されなかった。

時期 7世紀後半

第7号土坑（第21図）

位置 135 - 204グリッドに位置する。

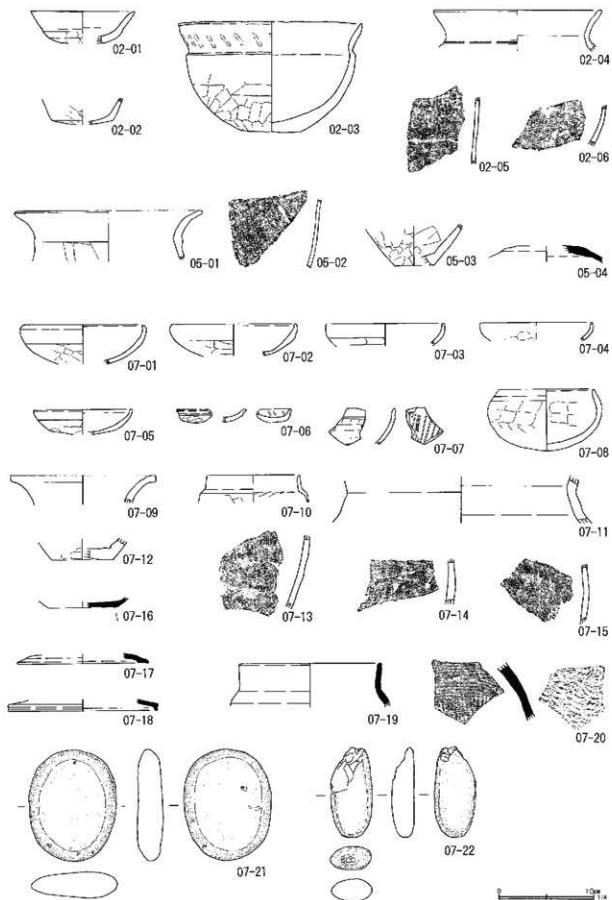
規模 検出範囲で長軸2.0m、短軸1.4m、深さ12cmを測る。

概要 平面形は不整楕円形である。北側が調査区外であり全容は不明。

重複 第1号掘立柱建物跡、P 103・104と重複する。本遺構は第1号掘立柱建物跡、P 103・104より新しい。

遺物（第22図、第9表）

土師器坏、鉢、甕、壺、須恵器坏、蓋、甕、磨石、叩石が出土した。1～7は土師器坏である。1～5は北武蔵型坏である。内湾・直立する口縁部に底部は丸底～丸底風となる形状である。6・7は内面に放射暗文が施される坏としたが、6は皿に近い形状。8は土師器鉢または壺である。内湾する口縁部に丸底となる形状である。11は土師器壺の頸部片である。9・10・12～15は土師器甕である。9は口径が小さく外に開く形状。流れ込みか。10は小形で口縁部が直立する。12は底部片、13～15は胴部片である。16は須恵器坏で、底部外面にヘラケズリが施される。17・18は須恵器蓋である。19・20は須恵器甕である。19は小型で口縁部が直立気味の形状。20は胴部片で



第 22 图 第 2·5·7 号土坑出土文物

外面に平行タタキとカキ目が施され、内面に同心円状の当て具痕がみられる。21は閃緑岩製の磨石。22は砂岩製の叩石である。

時期 7世紀末から8世紀前半か

第8号土坑 (第21図)

位置 136 - 204 グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸 2.6 m、短軸 1.3 m、深さ 34 cmを測る。

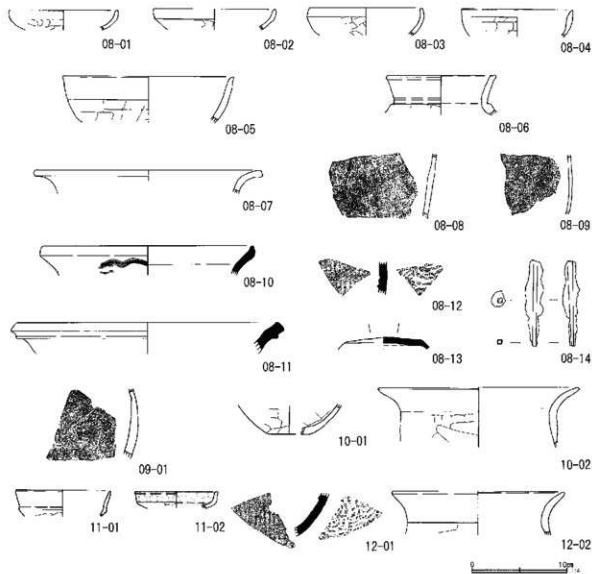
概要 平面形は隅丸長方形か。西側は調査区外であり、全容は不明である。

重複 P 88・102・136・137・138と重複する。

本遺構は P 88・136・138 より古い。P 102 より新しい。P 137 との時期差不明である。

遺物 (第23図、第9表)

土師器 坏、埴、壺、甕、壺、須恵器 甕、蓋、釘が出土した。1～4は土師器 坏である。1～3は北武蔵型坏で、口縁部が内湾・直立する形状である。4は比企型坏か。5は土師器で埴形態のもの。6は小型壺の口縁部片。7～9は土師器 甕で、7は長胴甕の口縁部片、8・9は胴部片である。10～12は須恵器 甕で、10は外面に櫛描波状文が施されている。11は口縁部片、12は胴部片。13は須恵器 蓋で無紐のもの。14は鉄製品の角釘。



第23図 第8～12号土坑出土遺物

時期 7世紀後半

第9号土坑(第21図)

位置 135-204グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸0.7m、短軸0.6m、深さ16cmを測る。

概要 平面形は隅丸方形である。明確にしえなかったが、本遺構はP91と一体となった柱穴掘方の可能性がある。

重複 P90・91・94と重複する。本遺構はP90より古い。また本遺構はP91と同時期または新しい可能性がある。P94との時期差は不明。

遺物(第23図、第9表)

土師器甕を検出した。1は胴部片である。

時期 時期不明である。

第10号土坑(第21図)

位置 135-204グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸0.6m、短軸0.5m、深さ16cmを測る。

概要 平面形は楕円形である。明確にしえなかったが、本遺構はP91と一体となった柱穴掘方の可能性がある。

重複 第1号掘立柱建物跡、P87・89と重複する。本遺構は第1号掘立柱建物跡、P87・89より新しい。

遺物(第23図、第9表)

土師器甕を検出した。1は底部片、2は口縁が水平に開く長胴甕である。

時期 7世紀後半

第11号土坑(第21図)

位置 135-204グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸0.6m、短軸0.3m、深さ29cmを測る。

概要 平面形は隅丸方形か。明確にしえなかった

が、本遺構はP113と一体となった柱穴掘方の可能性がある。

重複 P113と重複する。本遺構はP113と時期差不明だが、同時期の可能性がある。

遺物(第23図、第9表)

土師器環を検出した。1は環蓋模倣環。2は比企型環で外面口縁部と内面に赤彩が施される。

時期 7世紀前半

第12号土坑(第21図)

位置 135-204グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸0.9m、短軸0.9m、深さ14cmを測る。

概要 平面形は隅丸正方形である。南側が第1号掘立柱建物跡に切られる。明確にしえなかったが、本遺構はP99・100と一体となった柱穴掘方の可能性がある。

重複 第1号掘立柱建物跡、P94~100と重複する。本遺構はP96~98より古く、第1号掘立柱建物跡より新しい。また本遺構はP99・100と同時期または新しい可能性がある。

遺物(第23図、第9表)

須恵器甕、土師器甕を検出した。1は須恵器甕の胴部片である。2は土師器で長胴甕の口縁部片。

時期 7世紀末から8世紀初頭

第13号土坑(第21図)

位置 134-202グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸1.2m、短軸1.0m、深さ21cmを測る。

概要 平面形は楕円形とみられる。東南側は調査区外であり、全容は不明である。

重複 第3号溝跡、P1・2と重複する。本遺構は第3号溝跡、P1・2より新しい。

遺物 遺物は検出されなかった。

時期 時期不明である。

第9表 第2・5・7～12号土坑出土土物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
02-01	土師器杯	(10.8)	(3.4)	-	ABDJN	外面：黒褐色 内面：灰褐色	B	1%	
02-02	土師器甕	-	(2.7)	-	ABCKN	外面：明赤褐色 内面：灰褐色	B	底部 20%	
02-03	土師器鉢	(19.4)	(11.6)	(6.0)	AJK	にじみ褐色	B	40%	
02-04	土師器甕	(17.4)	(4.4)	-	ABDO	外面：浅黄褐色 内面：地灰黄色	B	口縁部 23%	
02-05	土師器甕	-	-	-	ABJK	外面：にじみ褐色 内面：明赤褐色	B	胴部片	
02-06	土師器甕	-	-	-	ABCEIN	外面：にじみ黄褐色 内面：灰褐色	B	胴部片	
05-01	土師器甕	(19.2)	(3.2)	-	ABIN	外面：明黄褐色 内面：にじみ黄褐色	B	口縁部 10%	
05-02	土師器甕	-	-	-	ABKN	外面：にじみ黄褐色 内面：明赤褐色	B	胴部片	
05-03	土師器甕	-	(4.3)	(4.2)	CEIKN	にじみ褐色	B	底部 40%	
05-04	甕蓋鉢蓋	-	(1.7)	-	AB	灰色	B	1%	
07-01	土師器杯	(12.4)	(4.1)	-	ABKN	褐色・にじみ褐色	B	10%	
07-02	土師器杯	(13.0)	(3.4)	-	ABW	外面：褐色 内面：にじみ褐色	B	1%	
07-03	土師器杯	(12.2)	(2.4)	-	ABJKN	明赤褐色	B	3%	
07-04	土師器杯	(11.7)	(1.9)	-	ABE	褐色	B	3%	
07-05	土師器杯	(10.2)	(2.7)	-	BEK	外面：褐色 内面：明赤褐色	B	20%	
07-06	土師器杯	-	-	-	ABEK	外面：浅黄褐色 内面：褐色	B	口縁部片	内面放射線文
07-07	土師器杯	-	-	-	AIN	褐色・にじみ褐色	B	口縁部片	内面放射線文
07-08	土師器鉢	(10.0)	(6.3)	-	ABK	外面：にじみ赤褐色 内面：褐色	B	40%	
07-09	土師器甕	(15.3)	(3.6)	-	ABEJK	外面：にじみ赤褐色 内面：にじみ褐色	B	口縁部 10%	
07-10	土師器甕	(9.7)	(2.9)	-	ABKIN	外面：にじみ褐色 内面：明赤褐色	B	口縁部 10%	
07-11	土師器蓋	-	(3.0)	-	AN	外面：にじみ黄褐色 内面：灰褐色	B	底部 8%	
07-12	土師器甕	-	(2.2)	(6.4)	ABIN	褐色	B	底部 20%	
07-13	土師器甕	-	-	-	ABJKN	外面：黄色 内面：明赤褐色	B	胴部片	
07-14	土師器甕	-	-	-	IK	外面：黄褐色 内面：明赤褐色	B	胴部片	
07-15	土師器甕	-	-	-	ABKN	外面：明赤褐色 内面：にじみ褐色	B	胴部片	
07-16	甕蓋鉢	-	(1.6)	(7.0)	BI	外面：灰白色 内面：灰褐色	B	23%	蓋部外面ヘラズリ
07-17	甕蓋鉢蓋	(13.7)	(1.6)	-	AB	灰色	B	3%	
07-18	甕蓋鉢蓋	(15.5)	(1.7)	-	AB	外面：黄灰色 内面：明赤褐色	B	3%	外面降灰
07-19	甕蓋鉢蓋	(14.4)	(4.6)	-	AB	灰色	A	口縁部 10%	
07-20	甕蓋鉢蓋	-	-	-	AN	外面：灰白色 内面：灰褐色	A	胴部片	内面同心円状おて具痕 外面タテキレ目施文
07-21	礫石	長さ 11.8	幅 9.2	厚 2.7			100%	炭線割製 重量 18g	
07-22	卵石	長さ (10.65)	幅 (4.3)	厚 (2.45)			73%	砂岩製 重量 136g	
08-01	土師器杯	(11.4)	(2.1)	-	ABCHK	にじみ褐色	B	20%	
08-02	土師器杯	(12.9)	(2.2)	-	ABEK	褐色	B	10%	
08-03	土師器杯	(11.8)	(2.9)	-	ABHK	にじみ褐色	B	10%	
08-04	土師器杯	(11.7)	(2.9)	-	ABEK	にじみ褐色	B	15%	
08-05	土師器鉢	(18.0)	(4.9)	-	ABCEIKN	褐色	B	20%	
08-06	土師器蓋	(11.2)	(4.2)	-	ABIN	外面：黒褐色 内面：にじみ褐色	A	口縁部 20%	
08-07	土師器甕	(23.9)	(2.5)	-	ABIN	褐色・にじみ褐色	B	口縁部 13%	
08-08	土師器甕	-	-	-	ABHK	褐色・にじみ褐色	B	胴部片	
08-09	土師器甕	-	-	-	ABCEKN	外面：にじみ赤褐色 内面：灰白色	B	胴部片	
08-10	甕蓋鉢蓋	(22.0)	(3.1)	-	ABN	外面：灰白色 内面：オリーブ黒色	B	口縁部 10%	口縁部線状文 外面降灰
08-11	甕蓋鉢蓋	(27.4)	(3.2)	-	ABN	灰色	B	口縁部 5%	
08-12	甕蓋鉢蓋	-	-	-	AI	灰色	B	胴部片	内面同心円状おて具痕 外面タテキレ目施文
08-13	甕蓋鉢蓋	-	(1.3)	-	ABIN	にじみ黄褐色	B	30%	
08-14	釘	長さ (9.1)	土層厚 (1.9)	土層厚 (1.75)				断面欠損 重量 20g 角状釘	
08-01	土師器甕	-	-	-	ABK	外面：灰黄褐色 内面：にじみ黄褐色	B	胴部片	
08-01	土師器甕	-	(3.0)	(4.0)	ABEJ	にじみ黄褐色	B	底部 23%	
08-02	土師器甕	(20.75)	(6.2)	-	ABKN	にじみ褐色	B	口縁部 10%	
11-01	土師器杯	(10.0)	(2.7)	-	AB	にじみ黄褐色	B	1%	
11-02	土師器杯	(8.0)	(1.7)	-	ABN	赤色	B	10%	内面全面・外面口縁赤色有り
12-01	甕蓋鉢蓋	-	-	-	ABN	外面：灰白色 内面：地灰黄色	B	胴部片	内面同心円状おて具痕 外面タテキレ目施文
12-02	土師器甕	(18.0)	(4.3)	-	ABIN	褐色	B	口縁部 20%	

5 柵列跡



第1号柵列跡 (第24図)

位置 135-202～134-204グリッドに位置する。

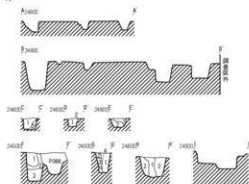
規模 検出範囲で延長9.4 mを測り、走行軸の方位はN-17°-Wを示す。検出した柱穴痕は7基である。P1が長軸24 cm、深さ16 cm、P2が長軸24 cm、深さ12 cm、P3が長軸25 cm、深さ13 cm、P4が長軸55 cm、深さ45 cm、P5が長軸26 cm、深さ31 cm、P6が長軸42 cm、深さ31 cm、P7が長軸34 cm、深さ30 cmを測る。柱間は、P1-2が0.8 m、P2-3が0.6 m、P4-5が0.8 m、P5-6が1.2 m、P6-7が0.6 mである。

概要 中央部分と南側延長が調査区外となる。第2号溝跡西側に並行して延びる柵列である。北側は第1・2号溝跡の連結箇所で留まる。本遺構と第1・2号溝跡は一体となった区画施設の可能性が考えられる。

重複 第4・6号土坑、P66・67と重複する。本遺構は、第4号土坑、P66・67より古く、第6号土坑より新しい。

遺物 遺物は検出されなかった。

時期 7世紀後半か



P1 土壇痕跡 (C-C')

1. 2. ST1/1 赤褐色粘土 礫化跡
2. 2. ST1/1 赤褐色粘土 礫化跡 2. ST1/2 灰黄色F+ff am大少量

P2 土壇痕跡 (D-D')

1. 2. ST1/1 赤褐色粘土 礫化跡 2. ST1/2 灰黄色F+ff am大少量
2. 2. ST1/1 灰黄色粘土 礫化跡 2. ST1/2 灰黄色F+ff am大少量

P3 土壇痕跡 (E-E')

1. 2. ST1/1 赤褐色粘土 礫化跡
2. 2. ST1/1 灰黄色粘土 2. ST1/2 灰黄色F+ff am大少量

P4 土壇痕跡 (F-F')

1. 2. ST1/1 赤褐色粘土 礫化跡 2. ST1/2 灰黄色F+ff am大少量
2. 2. ST1/1 赤褐色粘土 礫化跡 2. ST1/2 灰黄色F+ff am大少量
3. 2. ST1/1 灰黄色粘土 礫化跡 2. ST1/2 灰黄色F+ff am大少量

P5 土壇痕跡 (G-G')

1. 2. ST1/1 赤褐色粘土 礫化跡 2. ST1/2 灰黄色F+ff am大少量
2. 2. ST1/1 赤褐色粘土 礫化跡 2. ST1/2 灰黄色F+ff am大少量
3. 2. ST1/1 赤褐色粘土 礫化跡 2. ST1/2 灰黄色F+ff am大少量
4. 2. ST1/1 赤褐色粘土 礫化跡 2. ST1/2 灰黄色F+ff am大少量

P6 土壇痕跡 (H-H')

1. 2. ST1/1 赤褐色粘土 礫化跡 同化物検出
2. 2. ST1/1 赤褐色粘土 礫化跡 2. ST1/2 灰黄色F+ff am大少量



第24図 第1号柵列

6 性格不明遺構

第1号性格不明遺構（第25図）

位置 134-203～133-204グリッドに位置する。

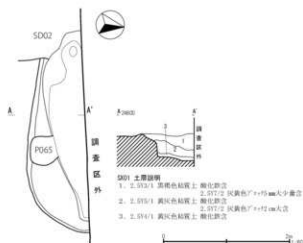
規模 検出範囲で長軸3.2m、短軸0.9m、深さ40cmを測る。主軸の方位はN-89°-Eを示す。

概要 北側は調査区外となる。竪穴状の遺構であるが用途を明確にする根拠は見出せなかった。

重複 第2号溝跡、P65と重複する。本遺構は、第2号溝跡より古く、P65より新しい。

遺物 遺物は検出されなかった。

時期 時期不明



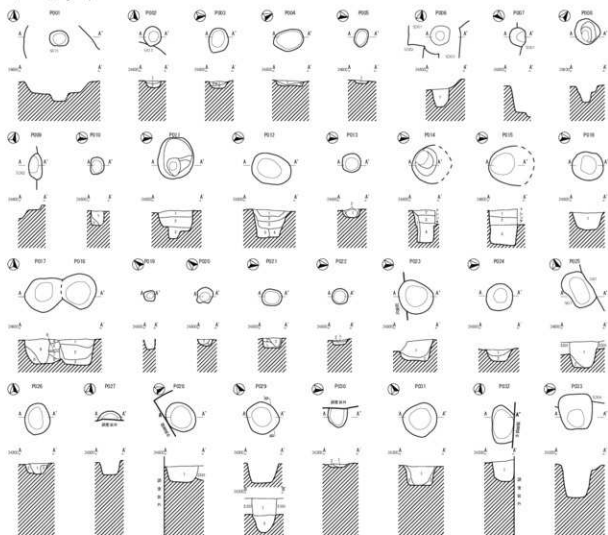
第25図 第1号性格不明遺構

7 ピット（第26～30図、第10・11表）

ピットは計138基検出し、一覧表にまとめた。所見として、135-204・136-204に集中するピットは直線的に並ぶものが多くみられた。さらに同エリアからは第1号掘立柱建物跡を確認できたこと等から、調査区外へと広がる掘立柱建物跡が所在する可能性があることを示唆しておく。

出土遺物は、古墳時代後期の遺物が主体を占める。001-1、2は土師器甕で1は口縁部片で直胴甕である。2は胴部片で焼成後の穿孔がみられる。011-1は酸化焰焼成の須恵器甕胴部片。034-01、02は土師器で口縁部が開く有段口縁坏である。035-1、2は土師器坏で坏蓋摸倣坏、2は比企型坏で、口縁部内面に赤彩がみられた。036-1は土師器甕の口縁部片。072-1は土師器で坏蓋摸倣坏。083-1は須恵器坏。095-1は土師器で口縁部が内湾する北武蔵型坏。101-1は土師器で内湾する比企型坏。102-1は木製品で柱根である。105-1は土師器甕の底部片。122-1と125-1は土師器で北武蔵型坏である。128-1は土師器で比企型坏である。

7 ビット



P00 土層説明
 1. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/2 黄褐色粘質土 融化跡

P03 土層説明
 1. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/2 黄褐色粘質土 融化跡

P04 土層説明
 1. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/2 黄褐色粘質土 融化跡

P05 土層説明
 1. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡 固化物層
 2. 2.07/2 黄褐色粘質土 融化跡

P06 土層説明
 1. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡
 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数

P10 土層説明
 1. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡
 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数

P11 土層説明
 1. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡
 3. 2.07/4 黄褐色粘質土 融化跡
 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数

P12 土層説明
 1. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡
 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数
 3. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡
 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数
 4. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡
 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数
 5. 2.07/4 黄褐色粘質土 融化跡 固上土層

P13 土層説明
 1. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡
 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数

P14 土層説明
 1. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡
 3. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数
 4. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数

P15 土層説明
 1. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数
 2. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数
 3. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数

P16 土層説明
 1. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡

P17・P18 土層説明
 1. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数
 2. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数
 3. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡 2.07/1 黄褐色粘質土
 4. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数
 5. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数
 6. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数
 7. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡 2.07/1 黄褐色粘質土
 8. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数
 9. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数 固化物層

P19 土層説明
 1. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数

P21 土層説明
 1. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡
 3. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡

P22 土層説明
 1. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数
 2. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡

P23 土層説明
 1. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡
 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数

P24 土層説明
 1. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡

P25 土層説明
 1. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡 融土層

P26 土層説明
 1. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数
 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数

P29 土層説明
 1. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡

P29 土層説明
 1. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数
 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡

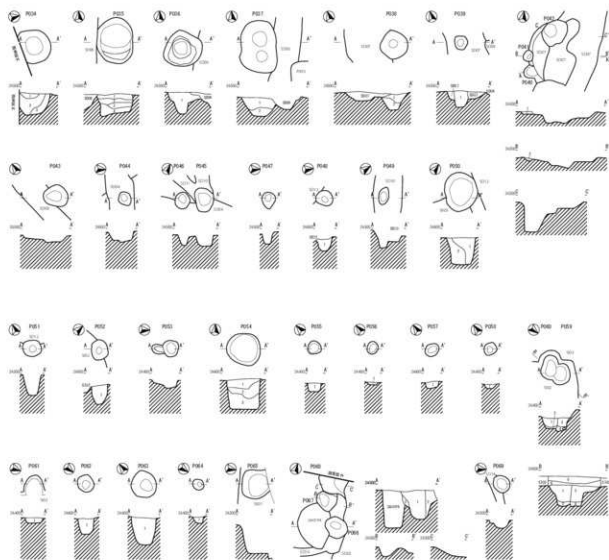
P30 土層説明
 1. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡

P31 土層説明
 1. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡
 2. 2.07/1 黄褐色粘質土 融化跡
 2.07/2 黄褐色粘質土+10 cm大少数

P32 土層説明
 1. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡 融土層
 2. 2.07/3 黄褐色粘質土 融化跡

第 26 図 ビット (1)





P024 土層説明

1. 2.0/2/2 黒褐色粘質土 融化跡
2. 2.0/2/2 黒褐色粘質土 2.0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量
3. 2.0/2/2 黒褐色粘質土 2.0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量

P025 土層説明

1. 2.0/4/1 黒灰色粘質土 融化跡 同化物微量
2. 2.0/4/1 灰白色粘質土 融化跡
3. 2.0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量
4. 2.0/2/2 黒褐色粘質土 融化跡 同化物微量
5. 2.0/2/2 黒褐色粘質土 融化跡

P026 土層説明

1. 2.0/2/2 黒褐色粘質土 融化跡 同化物・陸上農畜糞

P027 土層説明

1. 2.0/2/1 黒褐色粘質土 融化跡
2. 2.0/2/1 黒褐色粘質土 融化跡
3. 2.0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量

P028 土層説明

1. 2.0/2/1 黒褐色粘質土 融化跡
2. 2.0/2/1 黒褐色粘質土 融化跡
3. 2.0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量

P029 土層説明

1. 2.0/4/1 黒褐色粘質土 融化跡
2. 2.0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量

P040～P041～P042 土層説明

1. 2.0/2/1 黒褐色粘質土 融化跡
2. 2.0/2/1 黒褐色粘質土 融化跡
3. 2.0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量

P043 土層説明

1. 2.0/2/1 黒褐色粘質土 融化跡
2. 2.0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量

P050 土層説明

1. 2.0/4/1 灰白色粘質土 融化跡
2. 2.0/4/1 灰白色粘質土 融化跡
3. 2.0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量

P052 土層説明

1. 2.0/3/1 黒褐色粘質土 融化跡
2. 0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量

P054 土層説明

1. 2.0/4/1 灰白色粘質土 融化跡
2. 2.0/4/1 灰白色粘質土 融化跡
3. 2.0/4/1 灰白色粘質土 融化跡
4. 2.0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量
5. 2.0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量

P055 土層説明

1. 2.0/3/1 黒褐色粘質土 融化跡

P056 土層説明

1. 2.0/3/1 黒褐色粘質土 融化跡

P057 土層説明

1. 2.0/3/1 黒褐色粘質土 融化跡

P058 土層説明

1. 2.0/3/1 黒褐色粘質土 融化跡

P059・P060 土層説明

1. 2.0/3/1 黒褐色粘質土 融化跡
2. 2.0/3/1 黒褐色粘質土 融化跡
3. 2.0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量
4. 2.0/4/1 灰白色粘質土 融化跡
5. 2.0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量
6. 2.0/3/1 黒褐色粘質土 融化跡
7. 2.0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量

P061 土層説明

1. 2.0/3/1 黒褐色粘質土 融化跡

P062 土層説明

1. 2.0/3/1 黒褐色粘質土 融化跡
2. 0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量

P063 土層説明

1. 2.0/3/1 黒褐色粘質土 融化跡

P064 土層説明

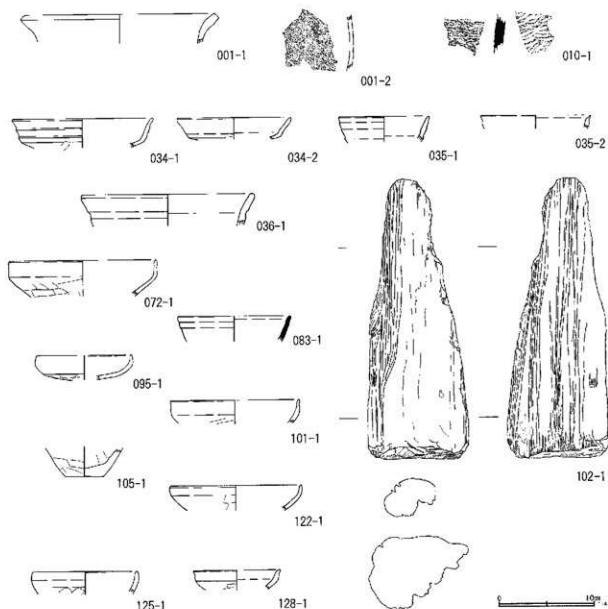
1. 2.0/4/1 灰白色粘質土 融化跡

P066～068 SA0/PA 土層説明

1. 2.0/4/1 灰白色粘質土 融化跡
2. 2.0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量
3. 2.0/3/1 黒褐色粘質土 融化跡
4. 2.0/7/2 灰黄色 γ + β cm大少量 同化物微量



第 27 図 ビット (2)



第30図 ビット出土遺物

第10表 ビット出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
001-01	土師器片	(20.0)	(3.1)	-	ABN	にぶい黄棕色	B	口縁部 10%	
001-02	土師器片	-	-	-	ABN	にぶい黄棕色	B	破片	厚孔有り
010-01	磁器片	-	-	-	CTN	明赤褐色	B	破片	強化発酵成 内面同心円状あて具痕 外面平行タタキ
034-01	土師器片	(14.8)	(3.1)	-	ABF	褐色	B	10%	
034-02	土師器片	(12.0)	(2.3)	-	ABF	褐色	B	10%	
035-01	土師器片	(9.4)	(2.75)	-	ABK	外面：明赤褐色 内面：褐色	B	15%	
035-02	土師器片	(11.4)	(1.43)	-	A	赤褐色	A	10%	外面赤彩有り
036-01	土師器片	(17.55)	(3.35)	-	BN	にぶい緑～黄棕色	B	口縁部 10%	
072-01	土師器片	(15.5)	(3.8)	-	BK	褐色・にぶい緑色	B	20%	
083-01	磁器片	(11.7)	(2.7)	-	AN	灰色	A	10%	
095-01	土師器片	(9.9)	(2.4)	-	ABN	褐色	B	20%	
101-01	土師器片	(13.4)	(2.4)	-	ACIK	褐色・黄棕色	B	10%	
102-01	木製品 柱礎	(29.55)	(10.75)	(7.4)	-	-	-	-	破片 重量97g (未乾燥) 柱礎小
105-01	土師器片	-	(3.1)	4.9	ABCN	外面：黒褐色 内面：にぶい黄棕色	B	破片 50%	
122-01	土師器片	(13.8)	(2.4)	-	ABN	褐色	B	10%	
125-01	土師器片	(11.6)	(2.4)	-	ABN	褐色	B	10%	
128-01	土師器片	(9.2)	(2.1)	-	ABN	明赤褐色	B	10%	外面・内面全面赤彩有り

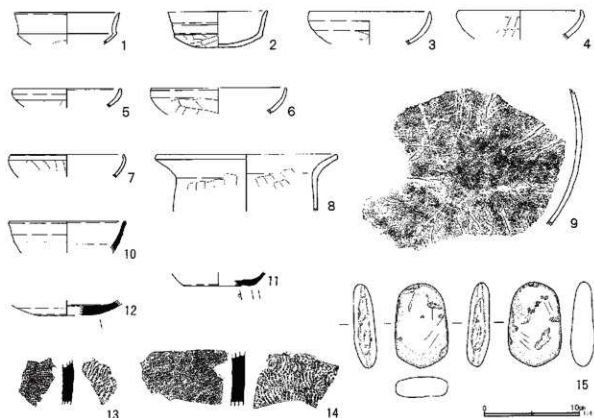
第11表 ビット計測表

番号	グリッド	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	時期	備考
P901	202-134	円形	39	24	26	土師器焼	7世紀後半	S13より古い*
P902	202-134	円形	32	26	11	—	—	S13より古い*
P903	202-134	楕円形	32	27	11	—	—	—
P904	202-134	楕円形	49	34	9	—	—	—
P905	202-134	楕円形	29	22	5	—	—	—
P906	202-134	円形	34	31	29	—	—	S01と同時期, S03より古い*
P907	202-134	円形	30	24	42	—	—	S01と同時期
P908	204-134	円形	41	40	26	—	—	—
P909	204-134	楕円形	42	21	8	—	—	S02との時期差不明
P910	202-134	楕円形	27	21	23	煎煮器焼	7世紀後半*	—
P911	202-135-134	楕円形	66	57	45	—	—	—
P912	204-135, 202-135	楕円形	64	48	45	—	—	—
P913	202-135	円形	31	31	13	—	—	—
P914	204-135	円形	62	37	52	—	—	—
P915	204-135, 202-135	円形	140	43	38	—	—	—
P916	202-135	円形	51	45	27	—	—	—
P917	202-135	円形	622	53	39	—	—	P 18より古い*
P918	202-135	円形	57	57	42	—	—	P 17より新しい*
P919	202-135	円形	20	18	16	—	—	—
P920	202-135	不整形円形	29	24	11	—	—	—
P921	202-135	円形	32	26	16	—	—	—
P922	202-135	円形	25	25	7	—	—	—
P923	202-135	円形	57	52	34	—	—	—
P924	202-135	円形	45	43	18	—	—	—
P925	202-135	楕円形	61	38	42	—	—	S101より新しい*
P926	202-135	楕円形	51	41	17	—	—	—
P927	202-135	楕円形	38	13	21	—	—	—
P928	202-136-133	円形	52	43	28	—	—	S101より新しい*
P929	202-135	円形	55	50	55	—	—	S101より新しい*
P930	202-136	楕円形	131	31	5	—	—	—
P931	202-135	円形	55	55	30	—	—	—
P932	203-131	楕円形	62	130	34	—	—	—
P933	203-131	圓丸方形	55	54	52	—	—	S006より古い*
P934	204-131	円形	60	60	35	土師器焼	7世紀前半	—
P935	204-131	楕円形	75	150	34	土師器焼	7世紀後半	S006より古い*
P936	204-131	圓丸方形	65	59	35	土師器焼	有世紀末～7世紀中頃	S006より古い*
P937	203-131	楕円形	63	57	20	—	—	S006より古い*
P938	203-131, 204-131	円形	66	66	25	—	—	S007より古い*
P939	204-132-131	円形	21	29	25	—	—	S007より新しい*
P940	203-132	円形	120	121	4	—	—	S007より新しい*
P941	203-132	円形	18	16	4	—	—	S007より古い*
P942	203-132-131	不整形円形	46	36	4	—	—	S007より古い*
P943	203-132	楕円形	40	34	10	—	—	S008より古い*
P944	204-132	楕円形	21	20	15	—	—	S004より古い*
P945	204-132	楕円形	40	30	17	—	—	S004より古い。S010・11との時期差不明
P946	204-132	円形	27	24	15	—	—	S004より古い*
P947	204-132	円形	27	21	18	—	—	—
P948	204-132	円形	27	24	20	—	—	S012より古い*
P949	203-133-132	楕円形	29	16	15	—	—	S010との時期差不明
P950	203-133	円形	63	153	44	—	—	S003より新しい*
P951	203-133, 204-133	円形	31	27	33	—	—	—
P952	204-133	円形	33	27	20	—	—	S102より新しい*
P953	204-132	不整形円形	42	33	13	—	—	S102より古い*
P954	204-133-132	円形	55	52	89	—	—	—
P955	204-133	円形	22	22	14	—	—	—
P956	204-133	円形	21	18	4	—	—	—
P957	204-133	楕円形	23	20	10	—	—	—
P958	204-133	円形	22	20	7	—	—	—
P959	204-133	円形	36	123	36	—	—	S102より古い*
P960	204-133	楕円形	38	123	31	—	—	S102より古い*
P961	204-133	楕円形	33	131	8	—	—	S102との時期差不明
P962	204-133	円形	29	25	25	—	—	—
P963	204-133	円形	44	40	41	—	—	—
P964	204-133	円形	19	17	10	—	—	—
P965	203-133	圓丸方形	40	44	44	—	—	S001より古い*
P966	203-134, 204-134	円形	37	31	42	—	—	S014より古い。S001・S002より新しい*
P967	202-134	円形	32	130	15	—	—	S001より新しい。P88との時期差不明
P968	203-134	不整形円形*	140	123	15	—	—	S002より新しい。P67との時期差不明
P969	204-134	円形	27	25	12	—	—	S014より新しい*
P970	204-134	円形	35	120	19	—	—	P71より古い*
P971	204-134	円形	130	38	20	—	—	P70より新しい*
P972	204-134	円形	52	45	43	土師器焼	7世紀後半	S005より古い*
P973	204-134	円形	24	24	10	—	—	7世紀後半
P974	204-134	円形	36	34	51	—	—	7世紀後半
P975	204-135	円形	29	19	12	—	—	P76との時期差不明
P976	204-135	不整形円形	43	36	5	—	—	P77より新しい*

番号	グリッド	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	時期	備考
P077	204-135	楕円形	43	121	25	—	—	P76 より新しい, P78 より新しい
P078	204-135-134	楕丸方形	75	72	27	—	7世紀後半	S06, P77 より新しい
P079	204-134	楕円形	49	35	42	—	—	—
P080	204-134	楕円形	48	44	43	—	—	—
P081	204-135-134	円形	41	34	31	—	—	—
P082	204-135	円形	24	20	34	—	—	—
P083	204-135, 205-135	円形	(57)	(26)	24	破断器等	7世紀後半	S01との時期差不明
P084	204-205-135	円形	(39)	(30)	41	—	—	S01との時期差不明
P085	204-135	円形	56	49	45	—	—	P84より新しい
P086	204-135	円形	34	(24)	15	—	—	P85より新しい
P087	204-135	楕丸方形	61	34	53	—	—	S10より新しい, S01との時期差不明
P088	204-136	楕円形	64	47	54	—	—	S12より新しい, P128との時期差不明
P089	204-135	楕丸方形	34	30	35	—	—	S10より新しい, S01との時期差不明
P090	204-135	円形	46	41	52	—	—	S09より新しい
P091	204-135	円形	28	24	41	—	—	S09より新しい(5400期)
P092	204-135	楕円形	(34)	30	45	—	—	P93との時期差不明
P093	204-135	楕円形	(33)	29	40	—	—	P92との時期差不明
P094	204-135	不明	(40)	(28)	43	—	—	S01・S09・P96との時期差不明
P095	204-134	楕丸方形	88	67	49	土師器等	7世紀後半～ 8世紀初頭	—
P096	204-135	楕円形	(26)	39	35	—	—	S12より新しい, P94・98との時期差不明
P097	204-135	楕円形	26	19	23	—	—	S12より新しい, P98より新しい
P098	204-135	楕円形	46	28	47	—	—	S12・P96・97より新しい
P099	204-135	円形	19	18	31	—	—	S12より新しい(5400期)
P100	204-135	楕円形	51	36	46	—	—	S12より新しい(5400期)
P101	204-135	楕円形	53	41	56	土師器等	7世紀前半か	—
P102	204-136	円形	21	18	30	木製品, 柱組	—	S08より新しい
P103	204-135	円形	72	65	51	—	—	S07より新しい
P104	204-135	円形	50	42	52	—	—	S07より新しい
P105	204-135	不整形円形	(111)	50	44	土師器等	7世紀後半	P106より新しい
P106	204-135	不整形円形	45	(37)	37	—	—	P105より新しい
P107	204-135	円形	(48)	46	28	—	—	—
P108	204-136-135	円形	91	(54)	57	—	—	S01との時期差不明
P109	204-135	円形	47	(30)	22	—	—	—
P110	204-136	円形	46	38	28	—	—	—
P111	204-136-135	楕円形	56	46	46	—	—	—
P112	204-135	円形	42	39	21	—	—	—
P113	204-135	円形	60	(35)	56	—	—	P115より新しい, S01・S011との時期差不明
P114	204-135	楕円形	(24)	(12)	12	—	—	P115より新しい, P113-116との時期差不明
P115	204-135, 205-135	円形	(52)	(40)	50	—	—	P113より新しい, P116との時期差不明
P116	204-135, 205-135	円形	34	33	37	—	—	P114より新しい, P115との時期差不明
P117	205-136	円形	46	41	36	—	—	—
P118	205-136	楕丸方形	80	61	39	—	—	P119より新しい
P119	204-136, 205-136	円形	30	(14)	19	—	—	P118・120より新しい
P120	204-136, 205-136	円形	59	45	30	—	—	P119より新しい
P121	204-136-135	円形	49	36	17	—	—	—
P122	204-136-135	楕丸方形	66	(51)	22	土師器等	7世紀末～ 8世紀初頭	P123より新しい, P125との時期差不明
P123	204-136-135	楕丸方形	47	42	47	—	—	P122より新しい
P124	204-136-135	円形	(31)	27	20	—	—	P127との時期差不明
P125	204-136	円形	43	(31)	33	土師器等	7世紀後半	P126より新しい, P122との時期差不明
P126	204-136	円形	(30)	(26)	33	—	—	P125より新しい, P127との時期差不明
P127	204-136-135	楕円形	(36)	25	23	—	—	P124・P126との時期差不明
P128	204-136	円形	(60)	60	48	土師器等	7世紀前半か	P129より新しい
P129	204-136	楕円形	(30)	50	18	—	—	P128より新しい
P130	204-136	円形	61	56	45	—	—	—
P131	204-136	楕円形	78	(31)	40	—	—	—
P132	204-136	円形	41	36	35	—	—	—
P133	204-136	楕円形	43	48	43	—	—	P134より新しい
P134	204-136	不整形円形	52	(46)	35	—	—	P133より新しい, P131との時期差不明
P135	204-136	円形	34	27	48	—	—	P134との時期差不明
P136	204-136	円形	29	25	18	—	—	S08より新しい
P137	204-136	楕円形	34	(13)	8	—	—	S08との時期差不明
P138	204-16	円形	(51)	51	58	—	—	S08より新しい, P88との時期差不明

8 遺構外出土遺物 第1地点遺構外出土遺物(第31図、第12表)

表土剥ぎの際に出土した遺物について記述する。1～7は土師器環である。1は坏蓋模倣坏で口唇内面に段がみられる。2は有段口縁環。3～7は口縁部が内湾または直立する北武蔵型環である。いずれも丸底～丸底風形状となるもので、4～7はケズリの位置が高い。8は土師器甕で、口縁が「く」字に開く長胴甕。9は土師器壺の胴部片で、球胴形態となるものである。10・11は須恵器環で、10は口縁部片、11は南比企産の底部片で、外面が周辺ヘラケズリが施されている。12は須恵器長頸壺の底部片で東海産とみられる。底部外面はヘラケズリされ、内面には自然釉がかかる。13・14は須恵器甕の胴部片。15は安山岩製磨石で、表裏面及び両側面に使用痕がみられる。



第31図 第1地点遺構外出土遺物

第12表 第1地点遺構外出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器環	(11.0)	(3.3)	-	AEHIN	棕色	B	15%	
2	土師器環	(10.5)	(3.8)	-	AECHIN	内面: 棕色 内面: 明赤褐色	B	50%	
3	土師器環	(12.7)	(3.5)	-	AEDEK	棕色	B	15%	
4	土師器環	(13.0)	(3.1)	-	HS	棕色	B	10%	
5	土師器環	(14.2)	(2.6)	-	AEHKN	棕色	B	15%	
6	土師器環	(14.2)	(2.8)	-	AEKN	棕色	B	20%	
7	土師器環	(12.0)	(2.4)	-	AEHIN	棕色	B	10%	
8	土師器甕	(19.0)	(6.0)	-	AN	にじみ黄棕色	B	口縁部 50%	
9	土師器壺	-	-	-	AEHIN	外面: 赤褐色 内面: にじみ棕色	B	胴部片	
10	須恵器環	(12.1)	(3.35)	-	AP	灰色	A	10%	
11	須恵器環	-	(1.4)	(7.0)	APN	にじみ褐色	B	20%	南比企産 底部外面周辺ヘラケズリ
12	須恵器長頸壺	-	(1.5)	(7.4)	AN	灰白色	B	底部 25%	内面自然 自然釉 東海産 底部外面ヘラケズリ
13	須恵器甕	-	-	-	ADT	灰色	B	胴部片	内面同心円状あて具痕 外面平行タタキ
14	須恵器甕	-	-	-	ADN	灰色	B	胴部片	内面同心円状あて具痕
15	磨石	高 8.9	幅 5.6	厚 2.4	-	-	-	100%	安山岩製 重量 139g

V 遺構と遺物 2

第2地点

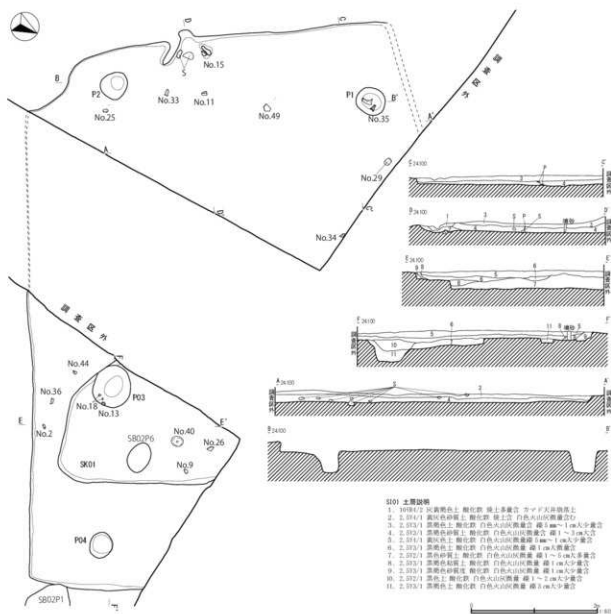
1 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡（第32図）

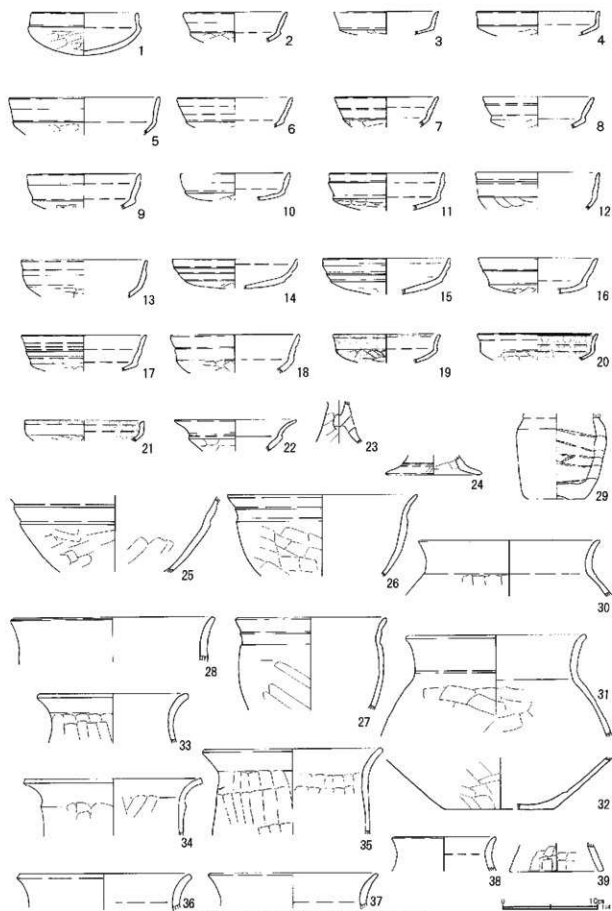
位置 73-203～75-204グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸8.5m、短軸6.0m、残存壁高12cmを測る。主軸の方位はN-54°-Wを示す。

概要 調査区を跨いで検出され、北東側が調査区外であるが、平面形は長方形とみられる。設備として、



第32図 第1号竪穴建物跡



第 33 图 第 1 号竖穴建物跡出土遺物 (1)

西壁にカマド、柱穴4基を検出した。また、建物内に土坑を検出したが、埋め戻されており、掘方の可能性がある。カマドは袖が僅かに残る程度で遺存状態は悪い。柱穴は、P1の直径が47cm、深さは50cm、P2の直径が44cm、深さは49cm、P3の直径が67cm、深さは35cm、である。P4の直径が49cm、深さは21cmである。土坑は、長軸2.6m、短軸1.9m、深さ12cmを測る。礫を含む堅牢な地盤の上に構築されている。

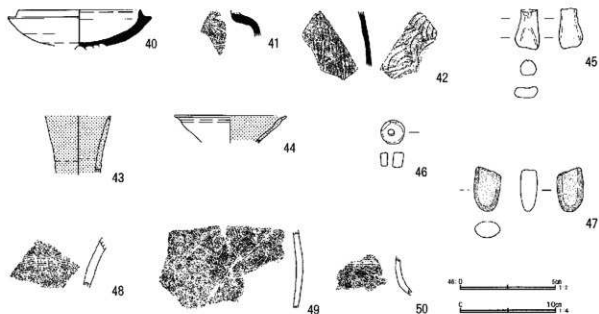
重複 本遺構は第2号掘立柱建物跡と重複し、本遺構が新しい。

遺物 (第33・34図、第13表)

土師器坏、高坏、鉢、甔、壺、甕、台付甕、須恵器高坏、甕、灰軸陶器長頸瓶、杯、白玉、磨石、弥生土器壺・甕等を検出した。

1～21は土師器坏で、1は坏身模倣坏、2～5は坏蓋模倣坏、6～18は有段口縁坏、19～21は比企型坏である。22～24は土師器高坏で、22は鬼高型高坏の坏部片。23・24は脚部片で、23は3方向の穿孔がみられる。25～27は土師器鉢で、口縁部と体部の境に段を有する。27は胴が張る形状。28は土師器甔で、口縁部は直立気味で軽く外反する。29は土師器で小型壺の胴部片か。内面に輪積痕が残る。30～37は土師器甕である。30～32は口縁部が軽く外反し、胴部は球胴形態となる形状。33～37は口縁部が「く」字に折れ、胴部には縦～斜位のケズリが施される長胴甕の形状になるもの。38・39は土師器台付甕とみられ、38は口縁部片、39は台部片である。40は須恵器高坏の坏部片である。41は須恵器甕の肩部片である。42は須恵器甕の胴部片。43・44は灰軸陶器で、流れ込みである。43は長頸瓶の頸部片で、内外面に施軸されている。44は坏とみられる形状で、内面に施軸されている。45は管玉の未成品ともみられたため掲載した。凝灰岩製である。46は滑石製の白玉である。47は砂岩製の磨石。48～49は弥生土器で流れ込みである。48は壺の胴部片、49は甕の胴部片、50は甕の頸部片で簾状文が外面にみられる。

時期 7世紀前半



第34図 第1号竪穴建物跡出土遺物(2)

第13表 第1号竪穴建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土製器環	(11.2)	(4.5)	-	AEK	外面：にじい・赤褐色 内面：にじい・褐色	B	8%	
2	土製器環	(11.0)	(3.1)	-	ABCH	外面：にじい・赤褐色 内面：明赤褐色	B	20%	
3	土製器環	(10.8)	(2.4)	-	ABEN	外面：灰黄褐色 内面：にじい・黄褐色	B	10%	
4	土製器環	(12.9)	(2.5)	-	AEK	外面：灰黄褐色 内面：にじい・黄褐色	B	10%	
5	土製器環	(15.7)	(3.9)	-	ABCK	外面：にじい・褐色 内面：褐色	B	10%	
6	土製器環	(12.0)	(3.1)	-	焼	灰白色	B	10%	
7	土製器環	(10.8)	(3.2)	-	AEH	褐色	B	15%	
8	土製器環	(11.6)	(3.3)	-	AEFH	褐色	B	20%	
9	土製器環	(12.0)	(3.6)	-	AEK	褐色	B	10%	
10	土製器環	(11.4)	(2.9)	-	CEK	にじい・赤褐色	B	10%	
11	土製器環	(12.0)	(3.9)	-	ABCK	褐色	B	20%	
12	土製器環	(13.0)	(3.85)	-	AEK	外面：褐色 内面：にじい・褐色	B	5%	
13	土製器環	(13.2)	(2.9)	-	EK	褐色	B	20%	
14	土製器環	(13.0)	(3.1)	-	AEK	褐色	B	20%	
15	土製器環	13.3	(3.8)	-	ABEN	褐色	B	50%	
16	土製器環	(12.4)	(3.7)	-	AEK	外面：灰褐色 内面：灰黄褐色	B	10%	
17	土製器環	(13.1)	(3.8)	-	ACK	褐色	B	20%	
18	土製器環	(13.0)	(4.0)	-	ABDIX	にじい・赤褐色	B	10%	
19	土製器環	(11.1)	(3.0)	-	ABIX	外面：にじい・赤褐色 内面：灰褐色	B	10%	外面全面 内面口縁部非直り 内面の赤非は於基要い
20	土製器環	(12.4)	(2.8)	-	AEH	にじい・赤褐色	B	15%	内面全面非直
21	土製器環	(12.5)	(2.1)	-	AEK	外面：明赤褐色 内面：赤褐色	B	10%	外面口縁部 内面全面非直有り
22	土製器高坪	(12.8)	3.3	-	ABEN	褐色	B	20%	
23	土製器高坪	-	(4.4)	-	AEH	外面：にじい・褐色 内面：褐色	B	脚部 20%	3單位の穿孔
24	土製器高坪	-	(2.1)	(9.4)	K	褐色	B	脚部 20%	
25	土製器鉢	-	(8.0)	-	AEHK	にじい・褐色	B	45%	
26	土製器鉢	(20.0)	(8.5)	-	AEK	灰黄色	B	10%	
27	土製器鉢	(21.5)	(4.7)	-	ABCK	外面：にじい・黄褐色 内面：灰黄褐色	B	口縁部 10%	
28	土製器瓶	(16.0)	(8.7)	-	AEJK	黄褐色	B	10%	
29	土製器蓋	-	(9.0)	5.5	AEK	外面：褐色 内面：明赤褐色	B	50%	内面輪縁状
30	土製器甕	(18.8)	(5.8)	-	ABEN	にじい・黄褐色	B	口縁部 20%	縁部折状
31	土製器甕	(18.6)	(10.7)	-	ABDIN	灰黄褐色	B	口縁部 45%	縁部折状
32	土製器甕	-	(5.4)	(10.8)	EN	外面：黄色 内面：にじい・黄褐色	B	底部 25%	縁部折状
33	土製器甕	(15.35)	(5.2)	-	AEKJ	外面：赤色 内面：灰黄色	B	口縁部 20%	長頸折状
34	土製器甕	(18.4)	(6.0)	-	ABDIX	にじい・黄褐色	B	口縁部 45%	長頸折状
35	土製器甕	18.55	(8.0)	-	AEK	にじい・黄褐色	B	口縁部 50%	長頸折状 内外面磨粒顯著
36	土製器甕	(18.6)	(3.9)	-	AEK	にじい・黄褐色	B	口縁部 10%	長頸折状
37	土製器甕	(18.0)	(3.7)	-	ABEEN	外面：灰黄褐色 内面：灰白色	B	口縁部 15%	長頸折状
38	土製器台付甕	(10.8)	(3.6)	-	BEK	外面：灰褐色 内面：黒色	B	口縁部 20%	
39	土製器台付甕	-	(3.0)	(9.25)	AEK	にじい・黄褐色	B	脚部 10%	
40	氣息器高坪	15.2	(4.1)	-	FEH	灰白色	B	坪部 50%	
41	氣息器罐	-	-	-	AE	外面：灰褐色 内面：褐色	B	破断片	
42	氣息器甕	-	-	-	AEK	灰黄色	B	破断片	
43	灰燼器長頸瓶	-	(8.0)	-	AE	灰オリーブ色	B	脚部 20%	内外面に灰燼
44	灰燼器器	(11.9)	(2.8)	-	AEH	外面：灰褐色 内面：灰オリーブ色	B	20%	内面に灰燼 ハケ塗り
45	管玉(丸成品)?	高 (2.1)	幅 (1.25)	厚 (0.8)				未成品	磁灰質製 重量 3.0g
46	白玉	高 0.3	幅 1.2	厚 0.7				100%	磁石製 重量 2.0g
47	磨石	高 (4.0)	幅 (2.7)	厚 (1.7)				60%	砂岩製 重量 36g
48	弥生土器蓋	-	-	-	AN	外面：明赤褐色 内面：褐色	B	破断片	内外面磨粒顯著
49	弥生土器甕	-	-	-	AEK	灰黄色	B	破断片	内外面磨粒顯著
50	弥生土器甕	-	-	-	EN	外面：黄色 内面：黒褐色	C	破断片	内外面磨粒顯著

2 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第35図）

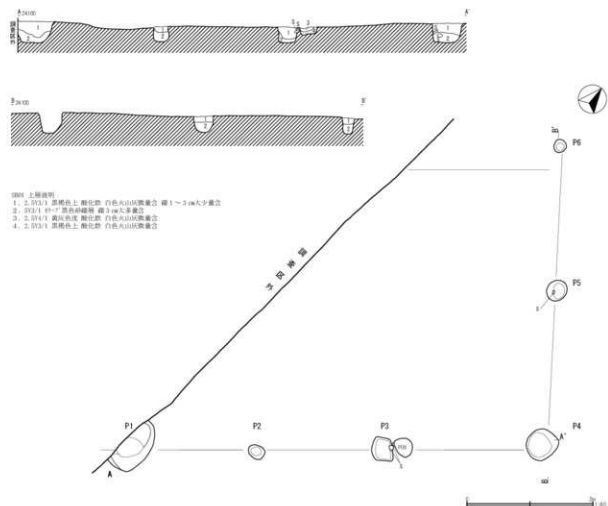
位置 74-204～75-206グリッドに位置する。

概要 検出範囲で2間×3間となる東西棟の側柱建物跡である。西側は調査区外となり全容は不明である。推定で梁行は4.8m、桁行は6.5mを測り、推定面積は31.2㎡となる。柱間は、梁行が北から2.3m-2.5mである。桁行は東から2.5m-2.0m-2.0mを測る。主軸方位はN-50°-Eである。柱穴掘方は概ね円または楕円形を呈するものとみられるが、礫が入る地山の影響で乱れている。P1のみ掘方が大きく、長径90cmだが重複等の影響があるかもしれない。P2～5は長径35～50cmであるが、P6は長径22cmと小規模である。掘方の深さは確認面から25～35cmである。時期不明であるが、第2号掘立柱建物跡と主軸方位が近いことから、同様な時期の可能性はある。

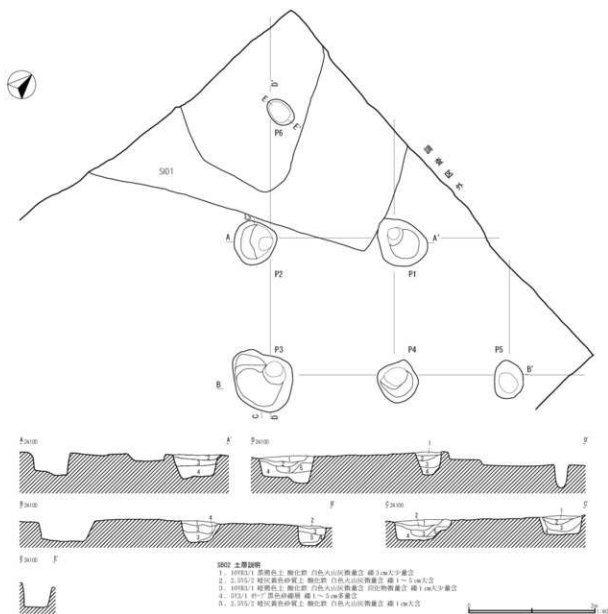
遺物 遺物は検出されなかった。

重複 重複はみられなかった。

時期 時期不明である。



第35図 第1号掘立柱建物跡



第 36 図 第 2 号掘立柱建物跡



第 37 図 第 2 号掘立柱建物跡出土遺物

第 14 表 第 2 号掘立柱建物跡出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	断面陶片	-	-	-	A	黄灰色	B	断面片	P2 より出土
2	土製器底	(18.0)	(4.4)	-	AEH	棕色	B	口縁部 10%	P2 より出土、壁腹形成
3	土製器片	(11.6)	(2.2)	-	AEX	緑・黄・褐色	B	8%	P1 より出土

第2号掘立柱建物跡(第36図)

位置 72・73-204グリッドに位置する。

概要 検出範囲で2間×2間以上となる総柱建物跡である。北側は調査区外となり全容は不明である。推定で北東-南西方向は3.8m、北西-南東方向は4.2mを測り、推定面積は15.9㎡以上となる。北東-南西方向は東から1.9m-1.9mである。北西-南東方向は西から2.1m-2.1mを測る。主軸方位はN-43°-Eである。柱穴掘方は概ね円または隅丸方形を呈するものとみられるが、礫が入る地山の影響で乱れている。P6のみ掘方が小さく、長径50cmだが重複により検出範囲が小さくなったためである。その他ピットの掘方は長径60~90cmである。掘方の深さは確認面から30~40cmである。

遺物(第37図、第14表)

須恵器甕、土師器甕、坏を検出した。

1は須恵器甕の胴部片で、外面に平行タキ、内面に同心円状の当て具痕がみられる。2は土師器甕の口縁部片で球胴形状になるもの。3は土師器で比企型坏である。口縁部が外傾する。

重複 第1号竪穴建物跡と重複し、本遺構が古い。

時期 6世紀以前

第3号掘立柱建物跡(第38図)

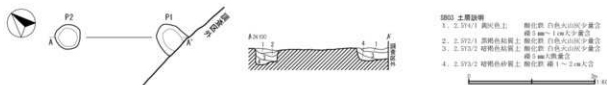
位置 74-204~75-206グリッドに位置する。

概要 検出できたのは柱穴2基で、北東側にあたる柱穴のみであり西・南側が調査区外である。全容はほぼ不明であるが、第2号掘立柱建物跡と比較し、柱間と主軸方位が概ね一致することから掘立柱建物跡として取り扱うものである。推定で東西棟とみられ、梁行の柱間は1.7mを測る。主軸方位はN-45°-Eである。柱穴掘方は円または楕円形を呈する。柱穴掘方はP1が長径45cm、確認面からの深さ20cm、P2は長径40cm、確認面からの深さ22cmである。時期不明であるが、第2号掘立柱建物跡と主軸方位が近いことから、同様な時期の可能性はある。

遺物 遺物は検出されなかった。

重複 重複はみられなかった。

時期 時期不明である。



第38図 第3号掘立柱建物跡

3 土坑

第1号土坑（第39図）

位置 74・75 - 205・206 グリッドに位置する。

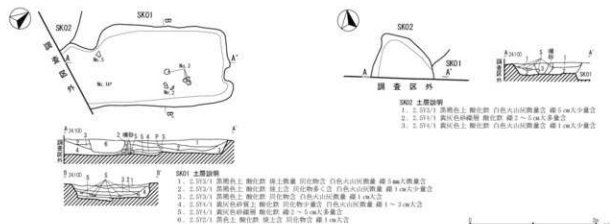
規模 検出範囲で長軸2.2 m、短軸0.9 m、深さ25 cmを測る。

概要 平面形は長方形とみられ、南側が調査区外となり全容は不明である。南側で掘方が乱れることから、明らかにしえなかったが、別遺構が重複している可能性がある。

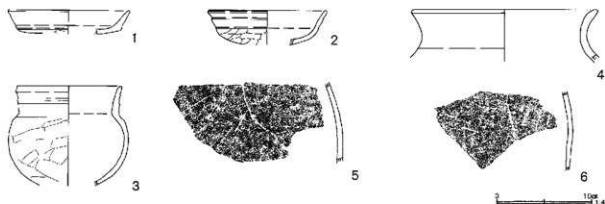
重複 第2号土坑と重複し、本遺構が第2号土坑より古い。

遺物（第40図、第15表）

土師器坏、甕を検出した。1・2は土師器坏で、1は坏蓋模倣坏、2は有段口縁坏である。3・4は土師器壺である。3は小型壺で、球胴形状のもの。4は外反する口縁部片である。5・6は甕の胴部片。



第39図 第1・2号土坑



第40図 第1号土坑出土遺物

第15表 第1号土坑出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器坏	(12.8)	(2.5)	(11.0)	AE	棕色	B	10%	
2	土師器坏	(12.5)	(3.4)	-	AEDEJN	灰黄褐色	B	40%	
3	土師器壺	(11.0)	(10.5)	-	ASDN	棕色	B	50%	球胴形状
4	土師器壺	(19.8)	(5.5)	-	AEETJX	外面：陶灰色 内面：L2.5a-黄褐色	B	口縁部1割	
5	土師器甕	-	-	-	ATN	外面：L2.5a-褐色 内面：陶褐色	B	胴部片	
6	土師器甕	-	-	-	ATN	外面：L2.5a-黄褐色 内面：L2.5a-黄褐色	B	胴部片	

時期 7世紀前半

第2号土坑 (第39図)

位置 75-206グリッドに位置する。

規模 検出範囲で長軸0.8m、短軸0.6m、深さ12cmを測る。

概要 平面形は長方形か。遺構の大半が調査区外であり全容は不明である。

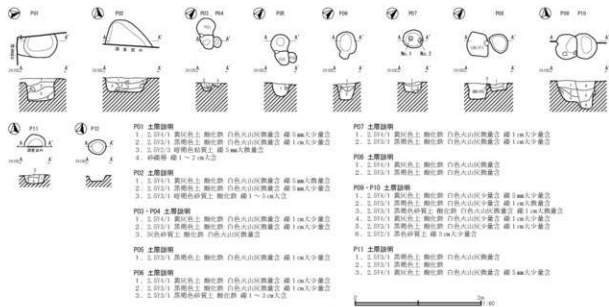
重複 第1号土坑と重複し、本遺構が第1号土坑より新しい。

遺物 遺物は検出されなかった。

時期 時期不明である。

4 ビット (第41・42図、第16・17表)

ビットは計12基検出し、一覧表にまとめた。P2は配置と形状から、土坑となる可能性がある。出土遺物は第4号ビットより土師器環が出土した。1は比企型環か。内外面に赤彩が施されている。2は内面に放射暗文が施される暗文環で、丸底を呈する。



第41図 ビット

第16表 ビット計測表

番号	グリッド	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	出土遺物	時期	備考
P01	75-206	楕円形	83	33	36	—	—	
P02	75-206	楕円方形	140	72	23	—	—	
P03	75-205	楕円形	33	22	13	—	—	P1-5より新しい
P04	75-205	円形	16	11	4	土師器環	7世紀後半	P2より古い
P05	75-205	楕円形	30	22	20	—	—	P3より古い
P06	75-205	楕円形	44	32	25	—	—	
P07	75-205	円形	32	36	15	—	—	
P08	75-205	楕円形	32	27	11	—	—	
P09	75-205	楕円形	40	32	31	—	—	P10より古い
P10	75-205	楕円形	86	32	44	—	—	P9より新しい
P11	74-205	円形	33	20	14	—	—	
P12	74-205	楕円形	27	24	9	—	—	



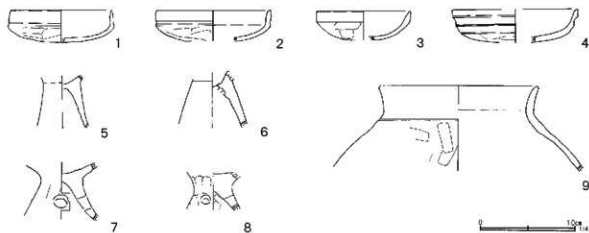
第42図 第4号ビット出土遺物

第17表 ビット出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器環	(15.4)	(3.4)	-	AKS	赤褐色	B	8%	内外面赤漆
2	土師器環	(14.4)	(3.6)	-	AKH	棕色	B	10%	内面に鉄製埋文

5 遺構外出土遺物 第2地点遺構外出土遺物 (第43図、第18表)

表土剥ぎの際に出土した遺物について記述する。1～4は土師器環である。1は坏身模倣坏か。口縁部が内傾する。2・3は坏蓋模倣坏で、口縁部が直立する。4は有段口縁坏である。5～8は土師器高坏で、いずれも脚部片である。7は3方向の穿孔がある。8は4方向の穿孔がある。9は土師器甕で軽く外反する口縁部に胴が張る球形形状のものである。



第43図 第2地点遺構外出土遺物

第18表 第2地点遺構外出土遺物観察表

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	土師器環	(10.7)	(3.4)	-	IK	じい・棕色	B	30%	
2	土師器環	(12.2)	(3.2)	-	AKD	外面：棕色 内面：灰褐色	B	2%	
3	土師器環	(10.0)	(3.0)	-	A	じい・黄棕色・棕色	B	20%	
4	土師器環	(13.2)	(3.5)	-	AKTJK	棕色	B	1%	
5	土師器高坏	-	(5.5)	-	AKCHN	褐色・じい・褐色	B	脚部 90%	
6	土師器高坏	-	(5.9)	-	AKH	明赤褐色	B	脚部 60%	
7	土師器高坏	-	(6.0)	-	AKCHN	褐色・じい・棕色	B	脚部 80%	3方向の穿孔
8	土師器高坏	-	(4.0)	-	AKI	じい・黄棕色	B	脚部 30%	4方向の穿孔
9	土師器甕	(16.8)	(8.9)	-	AKBTN	じい・赤褐色	B	口縁部 10%	球胴形状

VI 調査のまとめ

前中西遺跡は土地区画整理事業や民間開発等に伴い、発掘調査が進行しており、その全体像が徐々に明らかになりつつある。弥生時代では、遺跡の面積は30haに及び関東地方でも屈指の規模を誇り、近年の調査では、重要な成果が挙がっている。本報告第1地点の西側近接地点では、管玉161点とともに磯床木棺墓が4基が検出され、中期末ごろには栗林式土器文化圏との交流があったことが明らかとなっている。また、平成27年度調査では2点目となる精巧な造りの石戈が出土した。また、隣接する諏訪木遺跡からは平成26年度調査において、栗林系土器とともに顎の一部を欠損するものの完形の土偶型容器が出土するなど、注目に値する成果と評価できる。従来、北武蔵エリアの弥生時代中期以降の様相は、不明な点が多く判然としていなかったが、地域の歴史解明に向けて情報がそろいつつある状況といえる。今回の調査では、弥生時代の情報は決して多くはないが、遺構・遺物の検出状況と地形から、集落の東南限の可能性が推測できる状況がみられ、一定の成果があったものと考えたい。

本遺跡は弥生時代の成果が目覚ましいが、一方で時代を跨ぐ複合遺跡である点も忘れてはならない。今回の調査では、古墳時代後期の遺構が多く検出された。第1地点では、総柱式掘立柱建物跡の検出や、明らかにしえなかったものの同様の時期とみられる重なり合うピット群の検出、第2地点では、礫を含む地盤の上に構築された集落が確認された。本遺跡は新規荒川扇状地末端に所在するため、扇状地形の形成過程で生成される礫を含む地層が、現地表面付近または旧地表面に存在する。この堅牢かつ水捌けのよい地盤を選んで古墳時代後期の遺構・遺物がみられる点について指摘しておきたい。

本遺跡の経営の源は、扇状地末端特有の豊かな湧水である。時期不明となるものが多いが、どの調査地点においても溝跡が入り組んで検出される特徴が本遺跡にはある。水は農地経営において不可欠であり、各時代を通して恒常的な食糧生産に寄与していたと考えられる。今回の調査では、明確にしえなかった点が多くなってしまったが、本遺跡は奈良・平安時代にかかる痕跡も重要である。別地点において、総柱式掘立柱建物跡の検出や、古代瓦が出土するなど、官衛関連と疑われる遺構・遺物の検出があるものの不明な点が多い。また、本遺跡周辺地は、古代においては幡羅郡、埼玉郡、大里郡のいずれかに属すると考えられるが、明らかになっていない。このような現状のなかで、律令期の前段階といえる7世紀代の遺構・遺物の検出は、地域の歴史解明に向けて一歩前進したといえよう。今後の調査も予断を許さないが、さらなる成果の集積を待って、遺跡の詳細が明らかになることを期待したい。

参考・引用文献（紙数の都合で必要と思われるもののみ記載した。）

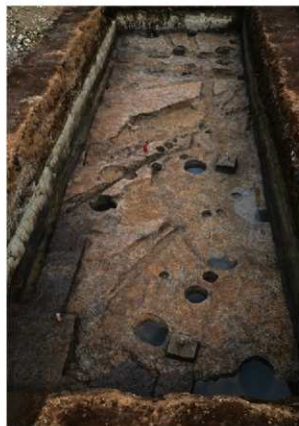
- 大谷 徹 2011 『川越田遺跡Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第375集
熊谷市教育委員会 2002 『前中西遺跡Ⅱ』
熊谷市教育委員会 2003 『前中西遺跡Ⅲ』
熊谷市教育委員会 2012 『前中西遺跡Ⅶ』
熊谷市教育委員会 2013 『前中西遺跡Ⅷ』
富田和夫 2002 『熊野遺跡（A・C・D区）』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集
富田和夫ほか 2008 「埼玉県・群馬県の様子」『古代社会と地域間交流』国士館大学考古学研究室40周年記念シンポジウム

写 真 图 版

第 1 地点



第 1 地点 第 1 調査区全景 (西から)



第 1 地点 第 2 調査区東側全景 (西から)



第 1 地点 第 2 調査区西側全景 (東から)



第1号竖穴建物跡
(第1調査区南から)



第2号竖穴建物跡
(第2調査区北西から)



第3号竖穴建物跡、
第13号溝跡
(第1調査区北東から)



第1号掘立柱建物跡、
第6～12号土坑
(第2調査区南から)



第1～3号溝跡、
第1号柵列、第13号土坑
(第1調査区南から)



第2・13・14号溝跡、
第1号性格不明遺構、
第1号柵列、第4号土坑
(第2調査区南から)

図版 4



第4・5号溝跡（第2調査区東から）



第6～8号溝跡（第2調査区南から）



第9～11号溝跡（第2調査区北西から）



第1号土坑（第2調査区東から）



第3号土坑（第2調査区北西から）



第2号土坑遺物出土状況（第2調査区北から）



第2号土坑（第2調査区北から）



第5・6号土坑（第2調査区南から）



第7号土坑（第2調査区南から）



第8号土坑（第2調査区南から）



第7号土坑遺物出土状況（第2調査区南東から）



第1号性格不明遺構（第2調査地点南から）



第102号ピット（第2調査区南から）



第2調査地点湧水発生状況



第2調査地点発掘調査状況

図版 6

第2地点



第2地点 第1調査区全景（南から）



第2地点 第2調査区全景（南から）



第1号掘立柱建物跡 (第2調査区北東から)



第2号掘立柱建物跡 (第1調査区北東から)



第1号竪穴建物跡 (第1調査区南東から)



第1号竪穴建物跡 (第2調査区北東から)



第1号竪穴建物跡遺物出土状況1 (第1調査区東から)



第1号竪穴建物跡遺物出土状況2 (第2調査区東から)



第1号土坑 (第2調査区北西から)



第2号土坑 (第2調査区南から)

图版 8

第 1 地点



第 8 图 1 ~ 8



第 10 图 3 ~ 14



第 15 图 1 ~ 12



第 17 图 1 ~ 9, 11 ~ 16



第 10 图 1 · 2



第 11 图 1 ~ 9 · 11



第 11 图 10



第 17 图 17 ~ 20



第 20 图 04-01 · 05-01 ~ 03 · 06-02 · 07-01, 02



第 13 图 1 · 2



第 20 图 05-01



第 20 图 06-01



第 20 图 09-01 ~ 11



第 20 图 09-12 ~ 14 · 11-01 · 12-01



第 22 图 02-01, 02, 04 ~ 06 · 05-01 ~ 04



第 22 图 02-03



第 22 图 07-01



第 22 图 07-02



第 22 图 07-05



第 22 图 07-08



第 22 图 07-03, 04, 06, 07, 09 ~ 15

図版 10



第 22 図 07-16 ~ 22



第 23 図 08-01 ~ 13



第 23 図 08-14・09-01・10-01, 02・11-01, 02・12-01, 02



第 31 図 1・3 ~ 7・10 ~ 15



第 31 図 2



第 31 図 8



第 30 図 095-1



第 31 図 9



第 30 図 001-1, 2・010-1・034-1, 2・035-1, 2・
036-1・072-1・083-1・101-1・105-1・122-1・
125-1・128-1



第 30 図 102-1

图版 12



第 33 图 7·9·12 ~ 14·22·23·26·24·25·28·27



第 33 图 32 ~ 34·36·37·38·39, 第 34 图 41·42



第 34 图 43 ~ 47·48 ~ 50



第 40 图 1·4 ~ 6



第 37 图 1 ~ 3



第 41 图 1·2



第 40 图 3



第 40 图 2



第 43 图 1



第 43 图 4



第 43 图 2



第 43 图 3



第 43 图 9



第 43 图 5



第 43 图 6



第 43 图 7



第 43 图 8

報 告 書 抄 録

ふりがな	まえなかにしいせきじゅう							
書名	前中西遺跡X							
副書名	埼玉県熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第2集							
巻次	—							
シリーズ名	—							
シリーズ番号	—							
編集者名	藏持 俊輔							
編集機関	埼玉県熊谷市遺跡調査会							
所在地	〒360-8601 熊谷市宮町2-47-1 TEL048-524-1111							
発行年月日	西暦2016(平成28)年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(°′″)	(°′″)		(㎡)	
まえなかにしいせき 前中西遺跡	くまがやしまつひろふちようめ 熊谷市末広三丁目 104番2	11202	59-092	36° 08′ 36″	139° 24′ 05″	20140818 ～ 20141010	230.00	分譲地造成 及び分譲住 宅建設
	くまがやしまつひろふちようめ 熊谷市末広四丁目 2506番7、 2506番8、 2506番9、 2506番12、 2509番2、 2509番8			36° 08′ 36″	139° 24′ 17″	20141104 ～ 20141125	104.34	分譲住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
前中西遺跡	集落跡 祭祀 墓	弥生時代 中期後半	住居跡	弥生土器・石器		当該期の集落域東南限とみられる状況を確認した。		
		古墳時代 後期	竪穴建物跡・掘立 柱建物跡・溝跡・ 土坑	土師器・須恵器・ 柱痕		当該期の集落域南側の広がりを確認し、総柱式掘立柱建物跡を検出した。		

埼玉県熊谷市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第2集

前中西遺跡X

平成28年3月31日発行

発行／埼玉県熊谷市遺跡調査会

印刷／朝日印刷工業株式会社